

日本地誌

秋山四郎著

共益商社藏版



日本地誌

日本地誌の序。

地理學の範圍は、極めて廣く、極めて大なり。凡て天地間の事物は、天然の現象、人事の行爲を論ぜず、皆此の中に含有せざるはなし。此の如く範圍廣大にして、事物煩多なるが上に、之を學ぶ生徒の學力、土地の情況にも差違あれば、これが教授に従事するには、頗る運用の妙を要す。

故にある學校にては、教科書を用ひずして、専ら口授法を用ふる所あり。かくすれば、運用自在にして、適切なる教授を施し得れども、時を費すこと甚だ多きを以て、得失相償はず。されば、勢教科書を用ひざるを得ず、然れども、教科書は、元世間一般の需用に充てんとして著したるものなれば、一學校の教科書としては、充分適當するものなきは、理の當然なり。

果して然らば、いかなる書が、教科書として稍適當のものなるか。曰く、教授の順序宜しく、謂ゆる登高自卑の主義に適へるもの。曰く、叙事簡明にして、教師の談話に充分の餘地あるもの。曰く、文章平易にして、生徒の字義を解するに苦まぬもの。曰く、趣味多くして、生徒の嫌厭を生ぜざるもの。是れ等の諸項を具備して、其の記述せる事物は、地理學上普通の智識を開き、思想の範圍を廣め、以て處世上の實益を收むるに足るものならば、先づ適當なりといはざるを得ず。

此の事は、單に予が一己の私見のみにはあらで、世の教師諸君が、一般に唱道せらるゝ所なり。故に予は本書を著すに當り、此の事に就きては、頗る意を用ひたれども、未だ適當ならざる所、定めて多かるべし。世の教師諸君、幸に示教せられんことを望む。

明治二十九年二月。

秋山四郎識す。

凡例。

一此の書は、尋常中學校、尋常師範學校、其他凡て中等教育を行ふ學校の教科書として著せるものなり。

一日本地誌を總論、各道誌、汎論の三章に分てり。但總論といひ、汎論といひたるは、別に意義あるにあらず。たゞ事の難易を以て、之を前後に分ちたるなり。

一地理書は、動もすれば、數に關する事を列舉して、乾燥無味に流れ易きものなれば、本文には、成るべく數字を省畧して、卷末に地理統計表を附載し、生徒の参考にまで供ふることとせり。

一地理と歴史とは、密接の關係あれば、往々歴史上の事蹟を載せられたるも、紙數に限りあれば、其の詳を述べがたし。教授の際、宜しく敷衍せられんことを望む。

一地名には、読み難き文字多ければ、一々假名を附けたり。山は、處によりて、或はサンといひ、或はザンといひ、センといひ、ゼンといひ、其の讀方一様ならず。依て是れ等は、皆假名を附け、ヤマと讀む所のみ假名を省きたり。

一畿内臺灣の二圖は、他の諸道の圖と同一の割合にあらざれば、たゞ一見して其の大小廣狹を比較することなかれ。

日本地誌目録

序説

地球の形状	一
地球の方位	二
地球の區劃	二
經度緯度	三
五帶	四
水陸の區劃	六
陸の形状	七
水の形状	八
地圖描寫法	一一

日本地誌

總論

位置	一三
境域	一三
廣袤	一三
區劃	一四
沿海	一五
海流海岸線及び港灣、島嶼	一七
地勢	二五
山誌	二五
樺太山系、支那山系、中央火山脈、富士帶	二五
水誌	二九

河川湖沼

平野.....三一

各道誌

畿内	三三
東海道	四七
東山道	七三
北陸道	九一
山陰道	一〇一
山陽道	一〇九
南海道	一一一
西海道	一三三
北海道	一五一

臺灣島……………一六三

汎論。

氣候……………一七九

生業及び産物……………一八二

農業、工業、林業、牧畜、漁業、鑛業、商業。

交通……………一八七

道路、鐵道、郵便、電信、電話、海運。

人誌……………一九〇

人種、人口、族制、宗教、教育、風俗、氣質。

國體……………一九七

政體……………一九九

立法、行政、司法。

兵制……………二〇一

陸軍、海軍。

財政……………二〇五

租稅、國債、貨幣。

外交……………二〇八

貿易……………二一〇

沿革……………二一〇

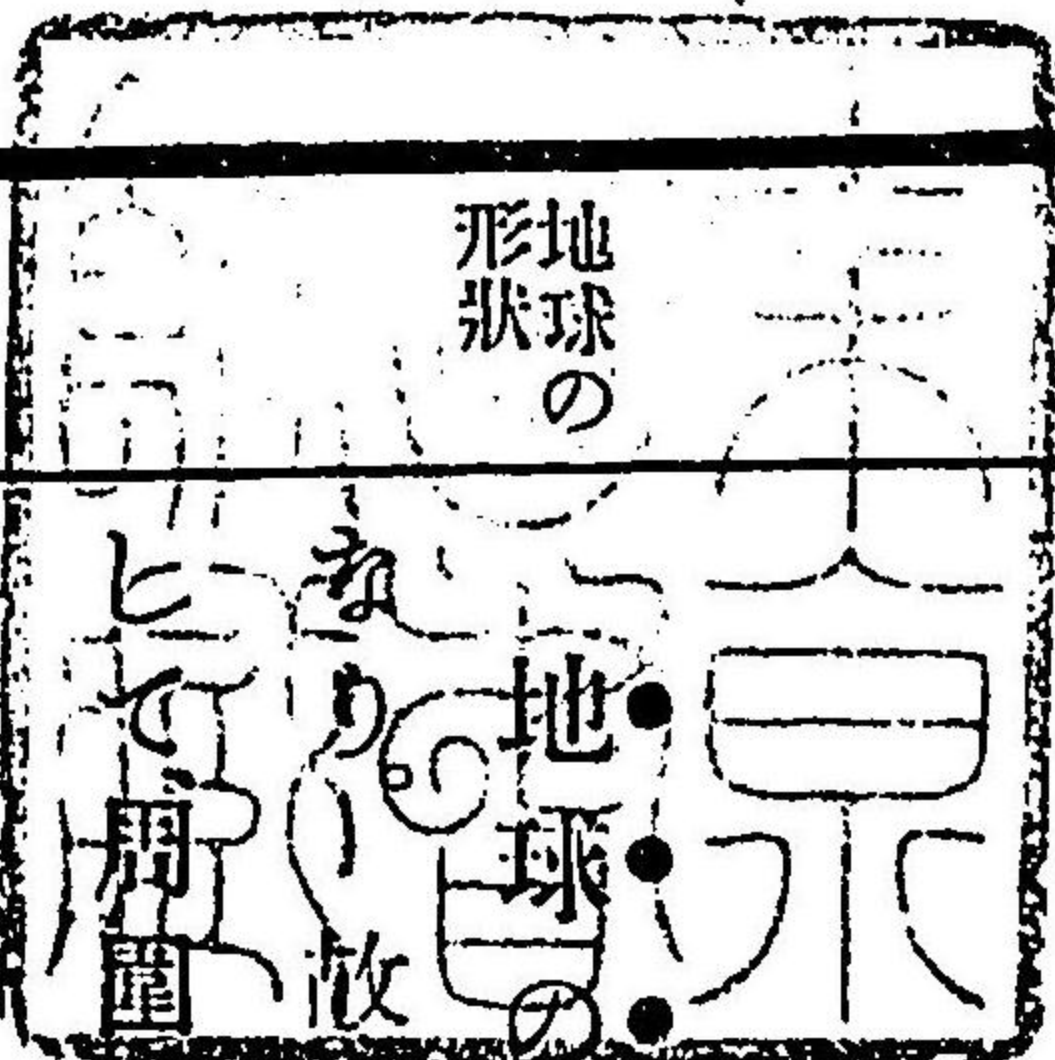
附錄。

地理統計表。

日本地誌目錄終。

日本地誌。

秋山四郎著。



序説。

地球の形状。我々の住ひ居る地球は、其の形、球の如き圓形なり。故に地球と名づく。其の大きさ、概畧直径三千二百餘里にして、周囲は、其の三倍なり。地球は、此の如く大なれば、素より一見して、其の圓形なることを知り難し。然れども、圓形の證據は、種々あり。今其の一例を擧ぐれば、大洋に向ひて出帆する船を見るに、漸く遠くなるに従ひ、先づ船体を見失ひ、次に帆を見失ひて、終りに櫓の頂上を見失ふものなり。かやうに下の方より次

第に見失ふは、全く地球の圓形なるが爲、水面彎形にして、うれに遮らるゝに因るなり。

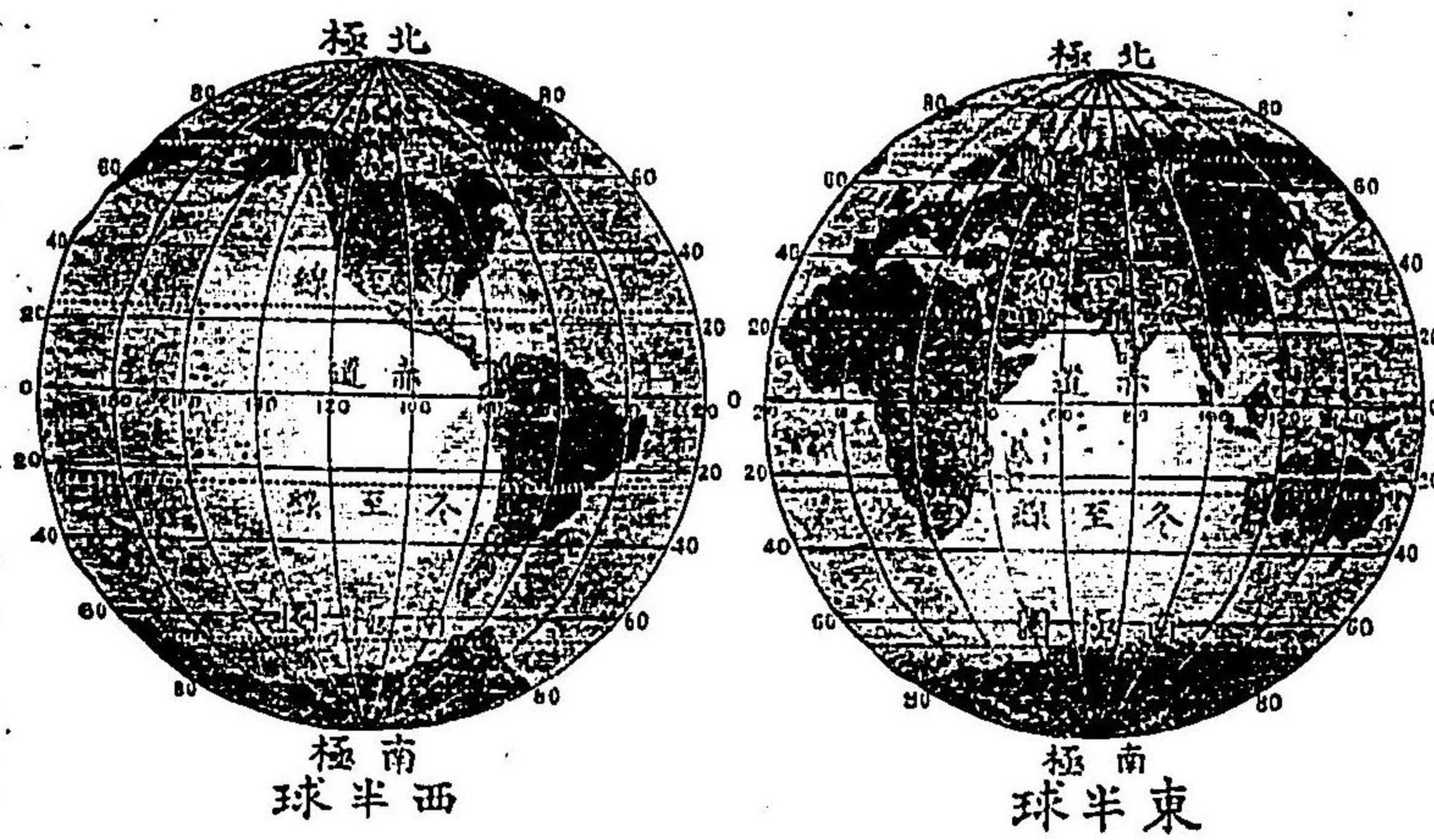
地球の方位

地球の方位。地球の表面には、東西南北の方位あり。太陽の昇る方を東といひ、沈む方を西といひ、左の手にて、東を指さし、右の手にて、西を指させば、前は南にて、後は北なり。此の外に、尙四つの方位あり。北と東との間を東北といひ、東と南との間を東南といひ、南と西との間を西南といひ、西と北との間を西北といふ。

地球の區劃

地球の區劃。地球の中心を南北に貫く虚線を設けて、其の北端を北極と稱し、其の南端を南極と稱す。此の兩極の中央に於て、地球を等分に分つ虚線を設け、之を赤道と稱す。此の赤道を界として、北を北半球と稱し、南を南半球と稱す。又赤道と直

緯度



角を爲して、地球を一周する虚線を設け、此の線を界として、東半球、西半球に分つ。

經度緯度。地球の表面に、縦横の虚線を設け、其の線を數へて、各地の位置、及び距離を知るに便す。之を經度、緯度といふ。

緯度は、赤道に並行したる線を以て、北半球、南半球を各九十度に分ち、赤道を零度として、うれより北緯幾度、南緯幾度と數ふるなり。かくして赤道に近き所を低緯度

の地といひ、兩極に近き所を高緯度の地といふ。

經度は、赤道及び緯度の線と直角を爲し、地球を一周する線を以て、東半球、西半球を各百八十度に分ちたるものなり。經度の數へ方は、一定したる起點なき故、以前は國々によりて異なりしが、現今は、英吉利國の首府倫敦ロンドンの近傍なるグリニッチの天文臺を以て起點と定め、東經幾度、西經幾度と數ふることとなれり。

經度も緯度も、一度を六十分に分ち、一分を六十秒に分つ。又緯度の一度は、いづれの處にても、其の距離概畧二十八里餘なれども、經度の一度は、赤道の邊のみ緯度と畧同一にして、それより南北に進むに従ひ、次第に減少す。

●五帶。地球の表面には、熱き所もあり、寒き所もあり、又温なる所もあれば、熱帶、北寒帶、南寒帶、北溫帶、南溫帶の五帶に分つ。

赤道の北二十三度半の處に、一つの緯線を設けて、之を夏至線といひ、赤道の南二十三度半の處に、同じく一つの緯線を設けて、之を冬至線といひ、此の兩線の間を熱帶といふ。熱帶の地は、地球上最も熱き地方なり。

北極より二十三度半の處に、一つの緯線を設けて、之を北極圈といひ、北極より北極圈までの間を北寒帶といふ。南極より二十三度半の處に、一つの緯線を設けて、之を南極圈といひ、南極より南極圈までの間を南寒帶といふ。此の兩寒帶の地は、地球上最も寒き地方なり。

北極圈と夏至線との間を北溫帶といひ、南極圈と冬至線との間を南溫帶といふ。此の兩溫帶の地は、地球上最も温なる地方にして、我が國は、北溫帶の中に在り。

水陸の區劃。

地球の表面は、陸と水との二つによりて成り、其の割合、陸は四分の一にして、水は四分の三なり。

五大洲

陸は、大小によりて、大陸と島との二つに分ち、水に取圍まれたる大なる陸を大陸といひ、小なる陸を島といふ。大陸は、地球上に二つありて、東半球に在るものを東大陸といひ、西半球に在るものを西大陸といふ。東大陸は、之を區劃して、亞細亞、歐羅巴、亞非利加の三大洲とし、西大陸は、亞米利加の一大洲とす。又東半球の大島なる濠斯多拉利亞と其の近傍の數多の島とを合せて、大洋洲と稱し、以上を世界の五大洲といふ。

五大洋

水の大なる部分を大洋といふ。大洋は、地球上最も大なる鹹水にして、實は一續きのものなれども、地理學上便宜の爲、之を五つに區劃す。之を太平洋、印度洋、大西洋、北極洋、南極洋といふ。

陸の形状

陸の形状。

陸には、種々の形状、及び名稱あり。數多の島、一つ所に集れるを群島といひ、一續きに列れるを列島といふ。陸の一部分、殆ど水に取圍まれたるを半島といふ。水中に突出でたる陸の一端を岬又は崎といひ、或は海角ともいふ。二つの陸を連ぬる狭き地を地峽といふ。海に臨める地を海岸或は海濱といふ。

平原

陸の表面には、平なる所もあり、高き所もあり、低き所もありて、皆ろれくの名稱あり。平にして廣き地を平原又は平野といひ、近傍の地よりも一層高き平原を高原といふ。廣大なる平原にて、水の潤なく、草木の生ぜざる砂原を沙漠といふ。

山

地面の著く高き所を山といひ、山の小さいものを岡といふ。山又は岡の間なる低き地を谷といふ。山は、たゞ一つ孤立すると

火山

とは、甚だ稀にして、通例多くの山、連続するものなり。之を山脈といふ。又數條の山脈、一帯に連るものを山系といふ。煙又は火などを噴き出す山を火山といひ、其の噴き出す口を噴火口といふ。火山は、通例富士山の如く圓錐形を爲すものなり。火山は、現に烟又は火を噴き出し居るものを活火山といひ、昔は噴き出ししが、今は噴き出さぬものを熄火山といふ。是れ等の火山も、通例連続するものにて、之を火山脈といふ。山にても、岡にても、其の高低を定むるには、麓より計算せずして、海面を基礎とし、何尺と計るものなり。うは海面は、一樣に平なれども、麓は高低ありて、一定の標準に立たざればなり。

水の形状。 水にも種々の形状、及び名稱あり。大洋の一部に分にして、陸に近き所を海といふ。海水彎形を爲して、陸地に入

水の形状

湖

川

り込みたる所を灣といふ。小き灣にて、船の碇泊する所を港といふ。二つの水を連ぬる狭き水路を海峡又は水道といふ。大洋及び海の中には、海流と稱する流れありて、陸上の川に似たり。此の海流には、暖流と寒流との二種あり。

四面陸に取圍まれたる水を湖といふ。湖の水の流れ出づる口を湖口といひ、湖口に反對する所を湖頭といふ。湖は、通例淡水なれども、湖口なき湖は、鹹水なり。又湖は、處によりては、海とも稱す。

水の地上に涌出づるものを泉といひ、泉より流れ出づる細流を小川といひ、小川集りて、大なる流となりたるものを川といふ。小川又は川の流るゝ途中にて、急に低き所に落つる水を瀧といふ。川は、通例一筋の本流のみにはあらず、他より流れ込む川あ

流域

るものなり。之を支流といふ。川の始まる所を河源といひ、川の終る所を河口といひ、河源より河口までを三部に分ちて、上流中流、下流といひ、上流より下流に向ひて、左を左岸といひ、右を右岸といふ。大なる川は、下流に至りて、數派に分れ、數多の河口を爲すものあり。かやうなる川は、河口と河口との間に、三角形の洲を作るものにて、之を三角洲といふ。

川の本流支流全体の境界を流域といふ。川は單に長さのみをよしとせずして、流域廣きをよしとす。うは流域廣ければ、隨ひて灌漑運漕の便多ければなり。又川は、高き地より低き地に就きて、流るゝものなれば、たとへば二川ありて、一つは東に流れ、一つは西に流るれば、二つの河源の間に、一條の高地あるものにて、之を分水界といふ。

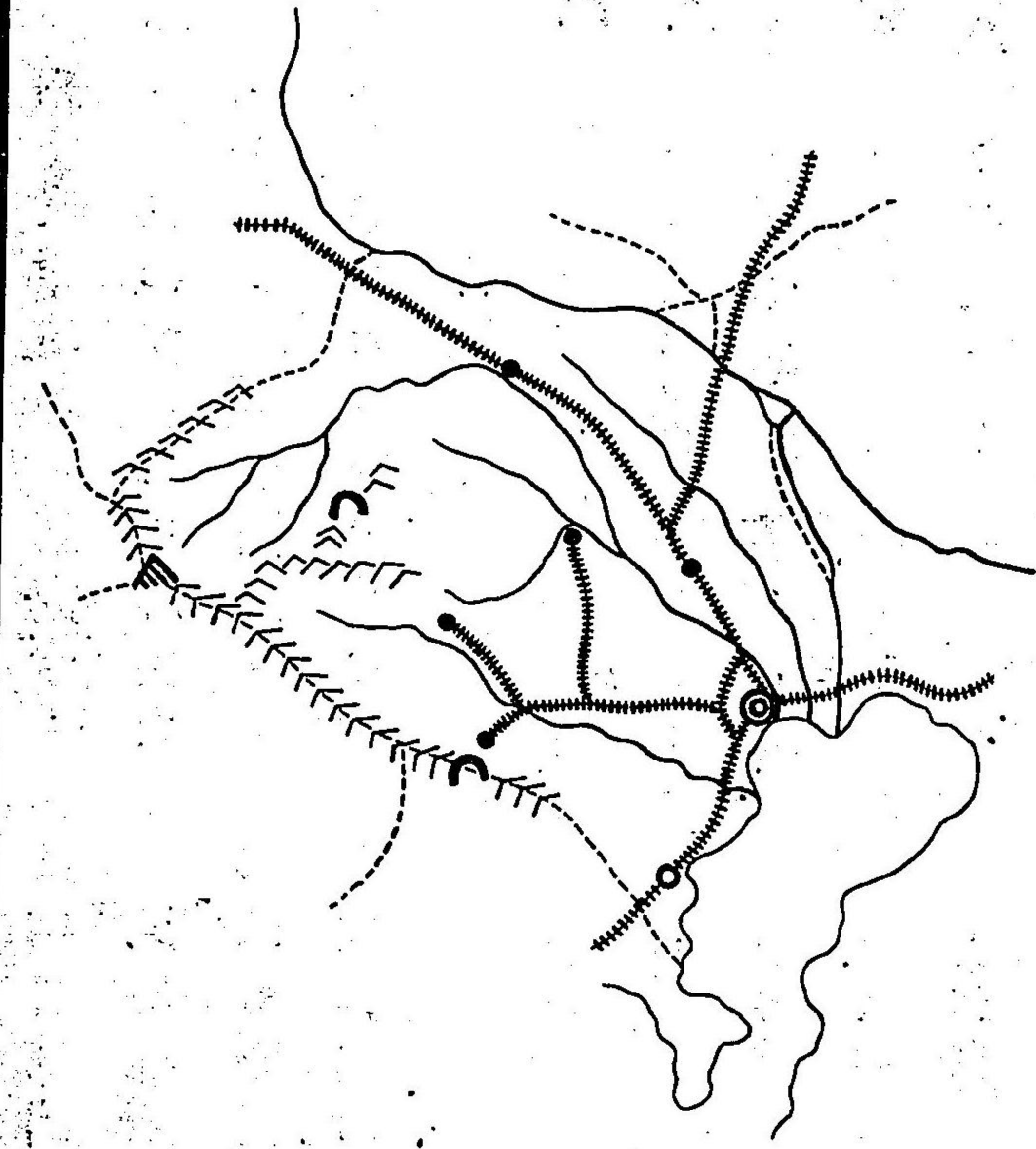
地圖描寫法

地圖描寫法。地理を講究するには、常に地圖を觀察して、地理の觀念を確實にすること肝要なり。又地理の觀念を一層確實にするには、自ら地圖を描寫すること最も有益なり。但其の描寫法は、最も簡易なるをよしとす。今左に其の方法を示さん。

符號

- 五千尺以下の山
- △ 五千尺以上の山
- △ 六千尺以上の山
- △ 七千尺以上の山
- △ 八千尺以上の山
- △ 九千尺以上の山
- ▲ 一萬尺以上の山
- 〰 山脈
- 〰 川
- 國界線
- 鐵道線
- ◎ 大都會
- 小都會
- 名邑

右の符號を心得、然る後地圖に就きて、重なる都會山川等の位置を記臆し、左の如く空にて幾度も描寫し、地理の觀念を確實にすべし。



日本地誌

總論

位置。我が日本帝國は、亞細亞洲の東邊に位して、本州、四國、九

州、蝦夷、臺灣の五大島、及び佐渡、隱岐、淡路、壹岐、對馬等、大小數千の島嶼より成り、北緯二十一度五十三分より起りて、五十度五十六分に至り、東經百十九度より起りて、百五十六度三十二分に至る。此の諸島の中、古名を舉ぐれば、淡路を淡道之穗之狹別島といひ、四國を伊豫之二名島といひ、隱岐を隱伎之三子島といひ、九州を筑紫島といひ、壹岐、對馬、佐渡は、今稱と同じにして、本州を大倭豊秋津島といひき。是れに因りて、我が國の古名を大八島國といひたり。

境域。全國の境域、北は阿哥都科海を隔て、露領悉伯利亞に

境域

位置

對し、西は日本海を隔て、露領悉伯利亞、朝鮮に對し、東海を隔て、支那に對し、南は太平洋なる西班牙領の呂宋及び馬利亞那群島に對し、東は太平洋を隔て、遙に亞米利加洲に對す。

廣袤

●廣袤。我が國は、東北隅の占守島より、西南隅の臺灣島に至るまで、直經大約一千二百里ありて、其の面積、大約二萬八千二百八十六方里あり。(此の中、臺灣島三千四百九十二方里あり、米だ詳ならず。)されは、之を隣國に比ぶれば、朝鮮の二倍にして、支那の三十分の一に當る。又之を歐羅巴洲の重なる國に比ぶれば、獨逸、佛蘭西よりも稍小にして、英吉利、伊太利よりも稍大なり。然れども、之を歐亞の二大洲に跨れる露西亞に比ぶれば、實に六十五分の一に過ぎず。

五大島の中、最も大なるは、本州にして、蝦夷、臺灣、九州、これに次ぎ、四國は、最も小なり、今其の面積を掲ぐれば、左の如し。

- 本州。 一、四四九二方里
- 蝦夷。 五〇五七。
- 臺灣。 三四九二。
- 九州。 二三一一。
- 四國。 一一五一。

區劃

●區劃。我が國(臺灣を除く)には、古昔の政治區劃と、現今の政治區劃との二様あり。但前者は、今日殆ど其の用なけれども、昔より傳はりたる稱呼なれば、日本地理を學ぶには、必知らざるべからず。故に今先づ其の區劃を示さん。

古昔の政治區劃。

- 畿内。 五國。 山城、大和、河内、和泉、攝津。
- 東海道。 十五國。 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相

模、武藏、安房、上總、下總、常陸。

東山道 十三國 近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後。

北陸道 七國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡。

山陰道 八國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐。

山陽道 八國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門。

南海道 六國 紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐。

西海道 十二國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球。

北海道 十一國 渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島。

一畿八道八十五國の名稱は、大概古昔の命名に係るものなり。

故に東海道といひ、東山道といひ、又は越前、越中、越後といふが如きは、皆古の帝都のありたる畿内を中心として名づけたるものと知るべし。

沿海。我が國は、四面海にて取圍まれたる海國にして、其の海は、皆太平洋の一部分なり。今北方より、西に向ひて、次第に説明せん。

阿
哥
都
科
海

蝦夷島の北に當り、深く亞細亞大陸に灣入する海は、即阿哥都科海なり。此の海は、東は露領悉伯利亞の堪察加半島と占守島との間なる千島海峽、及び千島列島の各水道を以て、太平洋に通じ、西は露領薩哈連島(一名樺太島)、韃靼海峽、宗谷海峽を以て、日本海に界す。海上霧深くして、沿岸に闇礁多く、航海者の苦慮する所なり。鯨、海狸、海豚等多く棲息し、又昆布の繁殖する海なり。

北海道及び本州と亞細亞大陸との間に稜形を爲したる海は、即日本海なり。此の海も魚族の蕃息すること夥し。此の海は、四面殆ど陸地に圍まれ、たゞ僅に韃靼海峡、宗谷海峡及び蝦夷島と本州との間なる津輕海峡、本州と九州との間なる下の關海峡、九州と朝鮮との間なる朝鮮海峡を以て、潮水を通ずるに過ぎざれば、潮汐の干満甚だ微なり。大潮の時にて、其の差、大概一尺四五寸に過ぎず。

九州の西なる海は、即東海にして、九州、琉球列島、臺灣と支那との間に在り。蓋此の海は、支那の東に當る故、支那にて、かく名づけたるものなり。

臺灣と支那との間を臺灣海峡といふ。此の海峡以南は、即支那海なり。此の海は、夏季、屢暴風起りて、航海危険なり。

臺灣の南端より、千島の北端に至る東南の海は、即太平洋なり。其の深さは、處によりて一様ならず。蝦夷島の東に當る所は、甚だ深くして、其の海底をトスカロラといふ。トスカロラの中に、特に深き所は、千島の東にして、二里五丁あり。之を世界第一の最も深き海なりとす。

●海流。我が國の沿海を流るゝ重なる海流二つあり。一を黒潮といひ、一を親潮といふ。

赤道の南北各二十度程の間、東より西に向ひて流るゝ海流ありて、之を赤道流といひ、之を二つに分ちて、赤道の北なるを偏北赤道海流といひ、南なるを偏南赤道海流といふ。此の偏北赤道海流、呂宋と臺灣との間に來り、それより折れて我が國の沿海を流る。之を黒潮といふ。黒潮は、臺灣の東岸を流れ、東北に向ひ

て、琉球の沿海を流る。こゝにて本支二派に分れ、支流は、北方に向ひ、對馬の東方より日本海に入る。之を對馬海流といふ。此の海流は、日本海の東部を流れ、其の一部分は、津輕海峽に入り、他は尙北流して、宗谷海峽に入り、阿哥都科海に入りて、消滅す。本流は、九州、四國、本州の東南海岸を流れ、大約北緯三十八度に至りて、二つに分れ、一つは東北に向ひ、亞立西安列島の南を流れて、亞米利加の方に流れ、一つは、堪察加海流と稱し、亞立西安列島と堪察加半島との間より白令海に入る。抑此の海流を黒潮といへるは、其の水色に因れるものなるが、實は暗青色にて、黒色にはあらず。舟人誤りて、かく稱へ始めたるなり。其の温度は、近方の海水より高く、航海の時、此の流域に入れば、著く温暖を感ずといふ。

親潮

阿哥都科海の東北隅より、堪察加半島の西岸に沿ひ、千島に向ひて流るゝ寒流を千島派流といふ。此の海流、堪察加の東岸より來る寒流と合ひて、千島の沿岸を流るゝものを親潮といふ。此の親潮は、千島より蝦夷島の東岸に沿ひて流れ、尙進みて本州の東岸にまで達す。

右の外、阿哥都科海に、尙二つの寒流ありて、一つを來滿派流といひ、一つを薩哈連派流といふ。來滿派流は、阿哥都科海の西北より流れ始めて、露領悉伯利亞なる沿海州の海岸に沿ひて流れ、朝鮮海峽を歴て、遠く臺灣海峽にまで達す。薩哈連派流は、薩哈連島の東岸に沿ひて流れ、宗谷海峽より入り來る對馬海流に混じて、其の形跡を失ふ。

海岸線

海岸線及び港灣。海岸線の屈曲いかんは、國の文化に影響

を及ぼすこと甚だ大なり。何となれば、海岸線の屈曲多ければ、随ひて港灣多く、港灣多ければ、船舶の入津多く、船舶の入津多ければ、貿易行はれて、繁榮に赴き、文化自然に進めばなり。これに反して、海岸線の屈曲少ければ、船舶の入津少く、文化停滞して進まず。

さて我が國の海岸線は、いかにといふに、幸にも屈曲多く、今日の程度にまで文化の進みたるは、實に偶然にあらず。但此の多くの屈曲も、所により一様ならず。地圖を披きて之を見れば、一目して瞭然たるべしと雖、之を要するに、太平洋に瀕する方は、屈曲多くして、日本海に瀕する方は少し。

今太平洋に瀕する方につき、其の概況を説明せば、先づ蝦夷島に在りては、襟裳崎、洋中に突出して、其の西側に火山灣あり。火

太平洋の港灣

山灣は、一に内浦ともいふ。火山灣の西に函館灣ありて、其の内函館港あり。本州に在りては、其の北端に陸奥灣ありて、深く陸地に灣入す。牡鹿半島突出して、其の蔭に松島灣あり。房總半島、三浦半島と相抱きて東京灣を爲し、其の内に横濱港あり。伊豆半島突出して、其の西側に駿河灣あり。三河の伊良胡崎と志摩半島との内に、伊勢の海、渥美灣あり。紀伊の潮岬を廻れば、大坂灣ありて、其の内に神戸港あり。山陽道と四國との間は、瀬戸内の海と稱し、數多の港灣ありて、其中、広島灣最も大なり。四國に土佐の大灣ありて、九州に、鹿兒島灣等あり。

日本海に瀕する海岸は、屈曲少けれども、蝦夷島には小樽灣あり。本州には、男鹿半島突出して、其の蔭に八郎潟あり。越後に新瀉港あり。能登半島突出して、其の蔭に七尾灣あり。其の外、

日本海の港灣

九州の
港灣

致賀灣、舞鶴灣、中海等あり。九州には博多灣等あり。九州は、太平洋に瀕する東岸よりも、東海に瀕する西岸の方、屈曲多し。彼、杵半島の内に鯛浦あり、島原半島の内に筑紫瀨ありて、共に大灣を爲す。此の外、小灣甚多く、著名なる港を長崎とす。臺灣は、海岸線の屈曲少ければ、隨ひて港灣に乏し。

以上掲げたる港灣の中、横濱、神戸、長崎、函館、新潟は、貿易港にして、之を我が國の五港と稱す。

島嶼

島嶼。五大島の外、大小數千の島嶼の中、周圍一里以上のもの、又は一里以下にても、人民の住へるもの、又は航海の時、目印となるものを合算するとき、總て五百餘島あり。是れ等の諸島の中、列島の形を成すものは、東北に千島列島ありて、西南に琉球列島、澎湖列島あり。是れ等の、列島の中央に當り、南方に散在する

地勢

ものは、伊豆七島、小笠原列島なり。

地勢。本州、四國、九州の三大島は、其の地勢、畧同一なり。即ち孰れも中央は、山嶽連り、其の兩側は、海岸に向ひて次第に傾斜す。されば、平野は、主として海岸地方に在りて、中央には、たゞ山間に數里の平野あるに過ぎず。故に本邦第一の産物なる米麥等は、専ら此の三大島の海岸地方より産出す。蝦夷島は、二條の山脈、殆ど十字形を爲して、島の中央に互り、それより四方の海岸に向ひて、次第に傾斜し、數多の平野を爲す。臺灣島は、東方に偏して、山嶽連り、それより西方の海岸に向ひ、次第に傾斜す。故に平野は、主として西方に在り。

山誌

山誌。我が國の地勢は、右の如き有様なれば、國中、山嶽甚だ多し。而して其の山嶽は、種々の方向に連りて、甚だ不規則に見ゆ。

然れども、近年、地理學の研究、日を追ひて精確となり、かく不規則に見ゆる山嶽も、其の構造より論ずれば、樺太山系、支那山系の二つに過ぎざることを發見せり。

又我が國は、最も火山に富める所にして、全國を通じて百七十座あり。此の火山も處々に散在して、不規則の如くに見ゆれども、其の實一定の火山脈あり。其中、重なるものは、中央火山脈、富士帶の二つにして、其の他に二三の火山脈あり。

樺太山系

樺太山系は、我が蝦夷島の北方なる露領樺太島より起れるに由りて、此の名あり。此の山系、樺太島を南走し、宗谷海峽を隔て、蝦夷島に連る。之を蝦夷山脈といふ。蝦夷山脈南走し、海を隔て、本州に連り、北上山脈となり、阿武隈山脈となり、西南に轉じて關東山脈となり、本州の中央部に至りて止む。

支那山系

此の山系は、海峽によりて、二か所陥落すれども、もと同一の山脈なれば、之を總稱して、樺太山系とは稱するなり。

支那山系

支那山系は、支那の南部より、我が國に連るものなれば、此の名あり。此の山系、支那大陸より、海に入りて、舟山列島となり、それより東海を隔て、我が九州島に連り、南北二派に分れ、北を筑紫山脈といひ、南を日向山脈といひ、共に東北に向ひて走る。日向山脈は、海を隔て、四國に連りて、四國山脈となり、又海を隔て、紀伊に連りて、紀伊山脈となり、又海を隔て、赤石山脈となりて終る。筑紫山脈は、下の關の海峽を隔て、中國に入りて、中國山脈となり、東走して美濃飛驒山脈となりて終る。此の山系も處々にて陥落すれども、もと同一の山脈なれば、之を總稱して支那山系とは稱するなり。支那山系と、樺太山系とは、本州の

中央部にて接合し、其の地幅最も廣く、高山大嶽多し。

●●●●●●●●●●
中央火山脈

り、蝦夷島の東部より、西南に亙り、本州に入りて、陸奥の恐山より、本州の中央に亙り、盤梯山、那須岳、淺間山となり、信濃、飛騨を貫き、瀬戸内の海に入りて、九州に達し、阿蘇山となり、温泉嶽となり、再び海に入る。

●●●●●●●●●●
富士帯

富士帯は、樺太山系と、支那山系との接合點に當り、南北に連る一帯の火山脈にして、北は越後の燒山諸山より、富士山に連り、南に延きて箱根、伊豆半島、伊豆七島、小笠原島の島々より、遠く西班牙領の馬利亞那群島に亙る。

右の外、日本海に臨みて、鳥海火山脈、白山火山脈あり、九州の中央以南に霧島火山脈あり。

●●●●●●●●●●
水誌。我が國の地形は、狹長にして、中央に山脈連るを以て、大

川大湖なし。又我が國は、降雨多き故、毎年夏秋の降雨季には、諸川暴漲して、水害を爲すこと甚し。然れども、平時に在りては、大概灌漑の用に供ふることを得、運漕の便も亦乏しからず。且河口の地は、河流の伴ひ來る土砂、年々堆積して、大に平野を増す。

●●●●●●●●●●
河川。我が國の諸川中、最も大なるは、蝦夷島の石狩川にして、

長さ百六十七里、これに次ぎて、最も大なるものは、本州に在りては、信濃川、利根川、北上川、四國に在りては、吉野川、九州に在りては、筑後川等なり。然れども、其の長さは、長きも七八十里に出でずして、短きは三四十里に過ぎず。又臺灣の川は、孰れも短し。凡て我が國の諸川中、最も運漕の便あるものは、主として本州に在りて、其の水は、皆太平洋に入る。即其の第一なるものを利根川

とす。此の川は、本流支流を合すときは、舟筏を通ずること、大約二百二十餘里、舟運の便あること、實に全國の諸川に冠たり。これに次ぐものは、北上川にして、本流支流を合せ、舟筏を通ずること百七十餘里に達す。其の次は、淀川にして、本流の長さは、僅に二十里餘に過ぎざれども、支流を合すときは、舟筏を通ずること百六十餘里に及ぶ。此の三川は、本邦諸川の中、舟筏を通ずること最も長くして、最も有益なるものなり。

湖沼

湖沼。我が國の湖水は、其の種類を以て區別すれば、四種あり。第一は、近海の一部、泥砂に圍まれて、其の内に水の滯へたるもの、即日本海岸に在る羽後の八耶瀉、越後の鏡瀉、加賀の河北瀉の類なり。之を海岸湖といふ。第二は、海底隆起して、陸地となれるも、尙其の窪き所に水の溜れるもの、即常陸の霞が浦、印旛沼、長沼

平野

の類なり。之を低地湖といふ。第三は、地震などの時、地面窪みて、其處に水の溜れるもの、即日本第一の大湖なる琵琶湖などは此の類なり。之を陷落湖といふ。第四は、舊き噴火口に水の溜れるもの、即箱根の蘆湖、陸奥の十和田湖等なり。之を火口湖といふ。

我が國の湖水は、右の四種に過ぎざれば、海岸又は海岸に近き平野の湖水は、大概海岸湖、又は低地湖の種類に屬し、内地の湖水は、陷落湖、火口湖の種類に屬するものと知るべし。

平野。我が國第一の平野は、利根川、荒川等の流域に屬する關東八州の平野なり。廣袤大約三四十里に亙り、地味肥え、米、麥、其の他種々の農産物に富み、本邦第一の農業地方なり。其の他、本州に在りては、陸前の平野、濃尾の平野、淀川下流の平野、信濃川下

流の平野、四國に在りては、吉野川下流の平野、九州に在りては、筑後川下流の平野等、孰れも地味肥えて、農産物も亦饒なり。蝦夷島は、石狩の平野、十勝、釧路の平野等あれども、未だ開墾せざる地多し。又臺灣島は、西方に平野連りて、甘蔗、米等の産出夥し。

各道誌。

畿内。

汎論

●汎論。畿内は、日本全國の中央に位し、山城、大和、河内、和泉、攝津の五國あるを以て、五畿内とも稱す。其の面積甚だ小にして、八道又は、臺灣の大なるには及ばざれども、此の地方は、神武天皇、大和の橿原（今葛上）に都を建て給ひしより、明治の初めに至るまで、二千五百餘年の間、歴代の帝都、概ね此の中に在りたるを以て、治世には、常に文化の中心となり、亂世には、必兵争の地となる。されは、古來我が國の歴史上極めて關係多き地方にして、都鄙となく、山野となく、到る處古跡あらざるはなく、又昔日の建築に係る神社佛閣は、依然として處々に存在し、當年の美術技藝を窺ふべく、これに加ふるに名區勝地尠からざるを以て、日本全國の

中にて、最も趣味多き所なり。

人口の如きも、之を他の諸道に比ぶれば、最も稠密にして、一方里につき、平均五千七百餘人の割合なり。以て其の繁盛なるを知るべし。畿内五國は、現今左の如く二府二縣にて管轄す。

山城。

京都府。

大和。

奈良縣。

河内、和泉、及び攝津の東部一市七郡。

大阪府。

攝津の西部一市五郡。

兵庫縣。

地勢

地勢。北は中國山脈連り、南は紀伊山脈連り、中央は淀川、大和川の流域に屬して、こゝに畿内平原を成し、其の西は、大阪灣に瀕す。此の平原は、地味肥えて、人口最も稠密の所なり。南北の山脈は、各其の餘派を分出するを以て、畿内平原の中間、及び東方一

山誌

帯は、小山脈蜿蜒として連る。

山誌。南北及び其の他の山脈中、最も著名なるものを擧ぐれば、先づ山城には、京都の東北に比叡山あり。其の脈、南に連りて、一帯の岡を爲す。之を總稱して東山といふ。鞍馬山は、京都の北に在り。牛若丸の生立ちし所にて、最も名高し。其の北なる大悲山は、甚だ險峻なり。是れ等を總稱して北山といふ。愛宕山は、京都の西北に在りて、其の麓に紅葉を以て著る。高雄山あり、其南に櫻花を以て著る。嵐山あり。是れ等を總稱して西山といふ。笠置山は、大和の界に在り。後醍醐天皇の事蹟を以て著る。大和の吉野山は、滿山櫻樹にして、花時には、遊人群集す。且此の山は、南朝五十餘年の間、行宮のありし所にして、歴史上の遺跡甚だ多し。吉野山の南は、金峯山、山上岳等聳えて、吉野十二

峯の稱あり。此の外、國見山、高見山、大臺原山等は、皆大和の著名なる山なり。河内の金剛山は、大和界に聳え、其の山腹に楠正成卿の籠りたる千早の城趾あり。攝津の西部には、武庫、摩耶の諸山あり。武庫山の西北麓に有名なる有馬の温泉あり。摩耶山の山續きに、義經が逆落しせし鴨越の險あり。其の下は、一の谷にして、源平の古戰場なり。

川

水誌。畿内の川は、概ね西流して、大阪灣に入る。其中、最も肝要なるものを淀川とす。淀川は、源を近江の琵琶湖に發し、上流を勢多川といひ、山城の宇治に至りて、宇治川といひ、淀より以下を淀川といひ、下流は、大阪を貫き、安治川、木津川等の數派に分れて、大阪灣に入る。其の本流は、僅に二十里餘に過ぎざれども、桂川、木津川等の支流を合すを以て、其の流域甚だ廣く、舟筏を通

池

ずること百六十餘里に達し、頗る灌溉運漕の便あり。桂川は、上流を大堰川といひ、嵐山の麓を流れ、賀茂川を合せて、淀川に會す。大和川は、源を大和に發し、河内を貫き、和泉、攝津の界を流れ、堺浦に至りて、海に入る。此の川は、水量少くして、舟運の利多からず。特に毎年十一月より、翌年三月頃までは、水量最も減じ、僅に舟筏を通ず。吉野川は、源を大臺原山に發し、吉野山の麓を流れ、紀伊に入りて、紀の川となり、十津川は、大和の西南を流れ、紀伊に入りて、熊野川となる。此の二川も舟運の利多からず。此の外、攝津に、池田川、武庫川等あり。湊川は、平生水もなき小川なれども、正成卿忠死の古跡なるを以て、世に著る。

巨椋池は、山城に在りて、周回四里餘、俗に大池といふ。淀川の水害を防がんが爲に、太閤秀吉公の穿ちしものといふ。狹山池

は、河内に在りて、周回一里餘、其の昔灌漑の用に便せんが爲、崇神天皇の開かせられたるものといふ。

海岸

海岸。和泉、攝津と淡路島との間に包まれたる海を大阪灣といふ。但和泉の地は、古茅渚といひたるより、其の沖を茅渚の海といひたるが、今は一体に大阪灣と稱す。大阪灣は、南は紀淡海峽を以て紀の海に連り、西は明石海峽を以て播磨灘に接す。和泉、攝津の海岸は、屈曲少けれども、和泉の堺、攝津の大阪、神戸、兵庫は、灣内の要港なり。兵庫の南に斗出する岬を和田岬といひ、岬端に燈臺あり。兵庫の西を須磨の浦といひ、播磨の舞子の濱、明石の浦に連りて、有名なる勝地なり。

氣候

氣候。畿内の氣候は、概ね溫暖なれども、山地と海岸とは、多少の違ひあり。京都の如きは、寒暑ともに稍強く、冬は比叡嵐と稱

産物

する寒風甚だ寒し。これに比ぶれば、大阪の如きは、寒氣稍緩なり。雨量は、一体に少し。

産物

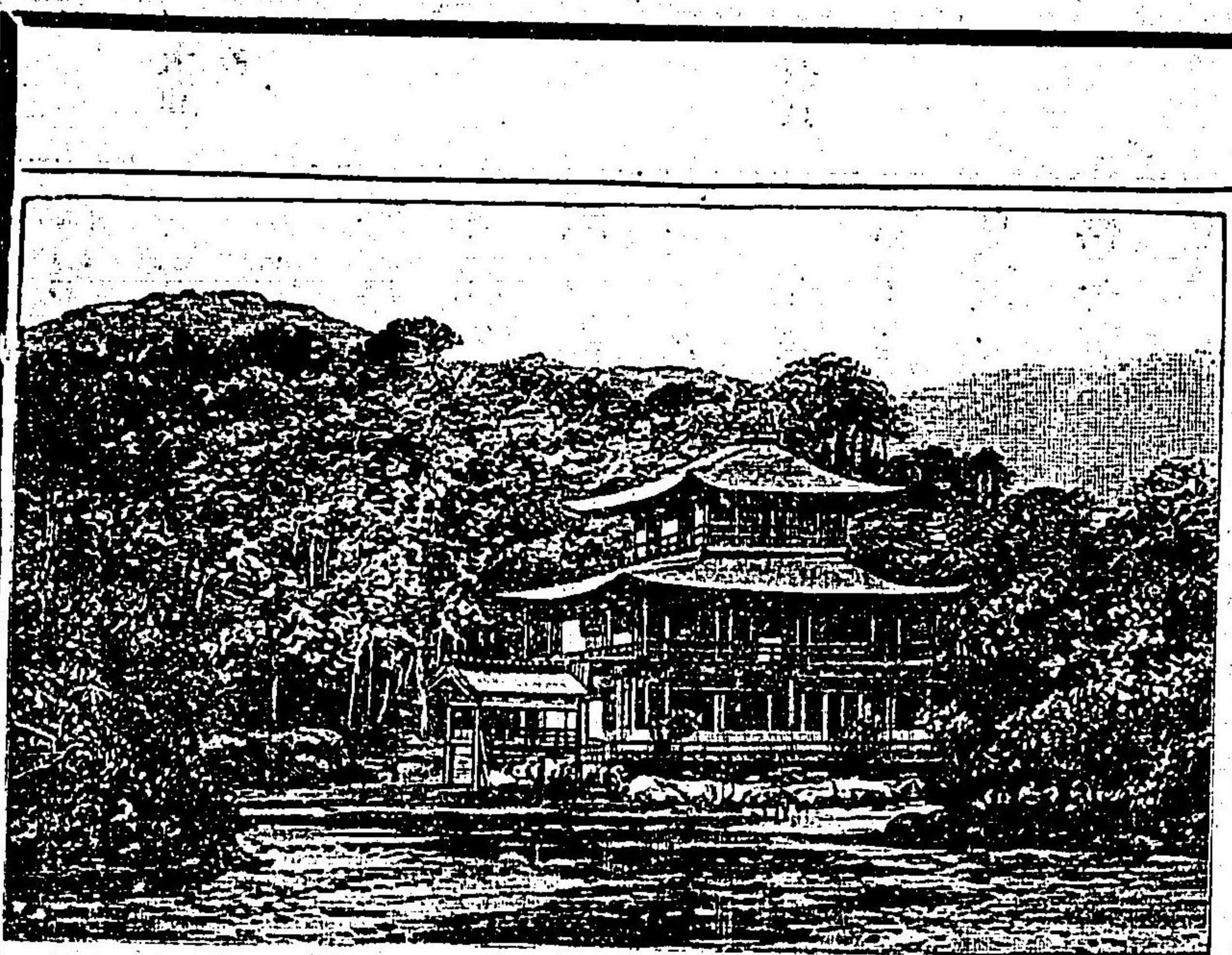
産物。畿内の重要な産物は、絹織物、酒、綿、綿絲、茶の五種なり。絹織物は、京都の西陣織にして、縹子、博多、紋織、縮緬、天鷲絨等、凡て上等の織物なり。酒は、攝津の伊丹、西の宮等にて醸造し、綿は、大和、河内の各郡より産し、綿絲は、大阪府下の各工場にて製す。茶は、山城の各郡より産出し、特に宇治を以て最とす。以上五種の産物は、一か年に産出する價額、極めて大なり。此の外、京都の賀茂川、染、清水、焼、大和の奈良、晒、墨、吉野紙、木材、河内の河内木綿、和泉の段通、鐵器、攝津の御影石等を著名なりとす。

處誌。山城の國は、昔は山背と書きしが、山河自然に城を爲すを以て、桓武天皇、都を奈良より、今の京都の地に遷し給ひし時、山

山城

城の字に改めさせられき。

京都は、山城の中央に位し、日本三府の一にして、桓武天皇延暦年間、都をここに遷し、平安城と稱へ給ひしより、明治の初年まで、一千餘年間の帝都なり。今は東京に對して、西京とも稱す。人口三十餘萬、京都府廳ここに在り。東は賀茂川に臨み、三面山を廻らして、南一面平野なり。此の地、昔は大内裏を建て、左京右京の區別ありしが、今は左京のみ存す。然れども、其の舊規今に尙存して、街衢端正、碁局の如く、市内を上京、下京の二區に分つ。舊皇居は、市の北隅に在り、二條城は、西方に在りて、今二條の離宮と稱す。市の内外には、神社佛閣、名所古跡、甚だ多く、賀茂、八阪の神社、北野の天神、金閣寺、銀閣寺、知恩院、清水の觀音等、最も名高く、又春は嵐山の櫻、秋は高雄の紅葉等、遊覽の地尠からず。京都は、此



寺 關 金

の如き地なれば、其の風俗、閑雅優美にして、自ら他の地方と異なり。かゝれば、其の産物も西陣織、賀茂川染等の如く、皆美術として賞賛せらるゝもの多し。特に現今は、琵琶湖より水を通じ、其の水力を利用して、電氣を起し、諸の工業を助くれは、本市の工業益發達して、美術工業の都府たるに耻ぢず。伏見は、京都を距ること僅に三里、淀川の北岸に位し、大阪及び奈良への要路に當り、山城に在りて

大和

は、屈指の名邑なり。
大和の國は、神武天皇、都を橿原カサハラに建て給ひしより、歴代の皇居、其の趾を此の國に存するもの甚だ多く、隨ひて山陵も畝傍山ウヂナカの神武陵を始め、其の數甚だ多し。又神社佛閣には、多武峯タケノの談山タンサン神社、長谷ナガタニの觀音、龍田リウテンの法隆寺等あり。又勝地には、吉野の櫻、月瀨の梅等ありて、諸國の人、常に來りて、名所舊跡を遊覽する者多し。之を大和巡と稱す。

奈良

奈良は、大和の北隅に位し、奈良縣廳の所在地にして、人口二萬六千餘、春日山、三笠山等、其の東に並立す。此の地は、元明天皇より、桓武天皇の遷都まで、七朝の間、の帝都にして、遷都の後、南都と稱せり。春日の社、東大寺の大佛丈三銅の坐像にして、丈五等、最も名高し。正倉院シヤウカウインの寶倉には、數多の御物あり。凡て奈良及び其

河内

の近傍には、古代の建築物、又は古畫古物ありて、我が國美術の淵藪とも稱すべし。郡山、五條は、大和の名邑なり。

河内は、八尾ヤタ、枚方カキ等の名邑の外、大なる都會なし。此の國は、楠正成卿の郷土にして、其の邸趾は、石川郡に在り。又正行卿の戦死せし四條シヤウジヤウ噺は、讚良郡にして、明治二十二年、其の地に四條噺神社を建て、卿を祀りて、別格官幣社に列せらる。此の國は、楠公父子の如き大忠臣も出で、弓削道鏡の如き大逆無道の賊臣も出で、又巨勢、金岡の如き名高き畫工も出でたる所なり。

和泉

和泉は、畿内五國の中、最も小なる國にして、昔は河内に屬し、茅渟チヌと稱して、離宮のありし地なるが、孝謙天皇の御代に、始めて建て、一國とせられき。堺は、和泉の北隅に位し、大和川の河口に在りて、攝津の界に接すれば、此の名あり。此の地は、昔外國の商

攝津

大阪

船來り、交易せしことあり。人口四萬七千ありて、富商多く、市街繁盛なり。段通、鐵器等を名産とす。市中なる妙國寺の蘇鐵は、甚だ大なるものにて、最も名高し。岸和田は、和泉の名邑なり。

攝津の國は、東南一帶の地、淀川下流の平野にして、田圃よく開け、又海に瀕する地は、諸方の船舶出入繁く、古より殷富の國なり。

大阪は、淀川の河口に位し、三府の一にして、人口殆ど五十萬、本邦第二の大都會なり。此の地は、本邦商業上の要衝に當り、東西の貨物、輻湊して、商業の盛なること、全國に冠たり。たゞ内國の商業のみならず、外國貿易も亦盛なり。重なる輸出品は、鰯、寒天、摺附木等にして、重なる輸入品は、砂糖、熟皮等なり。市中を東西、南北の四區に分ち、肆店軒を連ねて、豪商富家多し。市中は、溝渠縱横に通じ、橋梁の多きこと、他に其の類を見ず。此の地、古難波

神戸

津と稱し、仁徳天皇の都せられし所なり。又其の城は、天正年中、豊臣秀吉公の築かれしものなるが、今は僅に本丸のみ存し、第四師團司令部、其の中に在り。官衙は、此の外に、大阪府廳、控訴院、造幣局等あり。

神戸は、攝津の西隅に位し、五港の一にして、外國貿易の盛なること、横濱に次ぐ。重なる輸出品は、茶、米、樟腦等にして、重なる輸入品は、綿絲、砂糖、石油等なり。此の地



大阪

はもと寂寛たる寒村なりしが、慶應三年、開港後遽に繁盛に赴き、市街は兵庫に連り、兩地を合せて神戸市と稱し、人口殆ど十六萬、神戸に兵庫縣廳あり。神戸と兵庫との間なる湊川の東には楠正成卿を祀れる湊川神社ありて、境内に有名なる嗚呼忠臣楠氏之墓の碑あり。其の西は福原といひ、こゝに平相國清盛公が、安徳天皇を奉じて、都を遷し奉れる舊趾あり。神戸の近郊に布引の瀧ありて、夏時遊客多し。池田伊丹、西宮、尼崎等は攝津の重なる名邑なり。

東海道附小笠原島

汎論

●● 汎論。東海道は畿内の東に位し、太平洋に瀕する一帯の地にして、東西の長さ大約百二十里、南北の幅三十里に出入し、其中に伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸の十五國あり。相模以下の六國と東山道の上野、下野とを合せて關東八州といふ。但關東といふ名は昔相模の箱根山に關所ありて、此の八か國は其の東に當る故、かく稱へ始めたるなり。又それより以前は關東を坂東ともいひき。今は箱根の道の未だ開けざる以前は箱根の北なる足柄山ソノダケを通りたるが、其の坂の東に當る故、かく稱せしなり。

本道は源頼朝卿幕府を鎌倉に開きしより、本邦の政權久しく鎌倉に歸し、其の後織田、豊臣の二氏は尾張より起り、徳川氏は三

河より起り、甲斐の武田氏、相模の北條氏等、皆一方に割據し、徳川家康公、政權を握りて、幕府を江戸に開くに及び、爾後殆ど三百年、本邦の政權、江戸に歸し、王政維新後、江戸を東京と改め、都をこゝに遷させられて、本邦の首府とはなれり。

右の如く本道は、頼朝卿以來、我が國の歴史上、常に大關係ある地方にして、人文も夙に發達し、人口も畿内に次ぎて、稠密なり。本道の十五國、及び小笠原島は、現今左の如く一府八縣にて管轄す。

伊賀、伊勢、志摩。

三重縣。

尾張、三河。

愛知縣。

遠江、駿河、伊豆。七島を除く。

静岡縣。

甲斐。

山梨縣。

相模、及び武藏の南部一市三郡。

神奈川縣。

武藏の南部一市九郡、伊豆七島、小笠原島。

東京府。

武藏の北部十七郡、及び下總の西部一郡。

埼玉縣。

安房、上總、及び下總の南部八郡。

千葉縣。

下總の北部六郡、及び常陸。

茨城縣。

地勢

●地勢。北方は、概ね山嶽連りて、それより南に向ひ、次第に傾斜し、海岸は平坦なり。此の平坦なる地方の中、最も大なる平野は、東に關東八州の平野の大部分ありて、西に濃尾の平野の南部あり。關東八州の平野は、本邦第一の平野にして、其の中、武藏、下總の二國、過半を占む。武藏は、古武藏野と稱し、一望際なき草原なりしが、今は市街田圃連りて、其の跡を留めず。下總は、全國平坦にして、一の山嶽なく、小金が原、習志野、取香牧、小間子牧等の原野

山誌

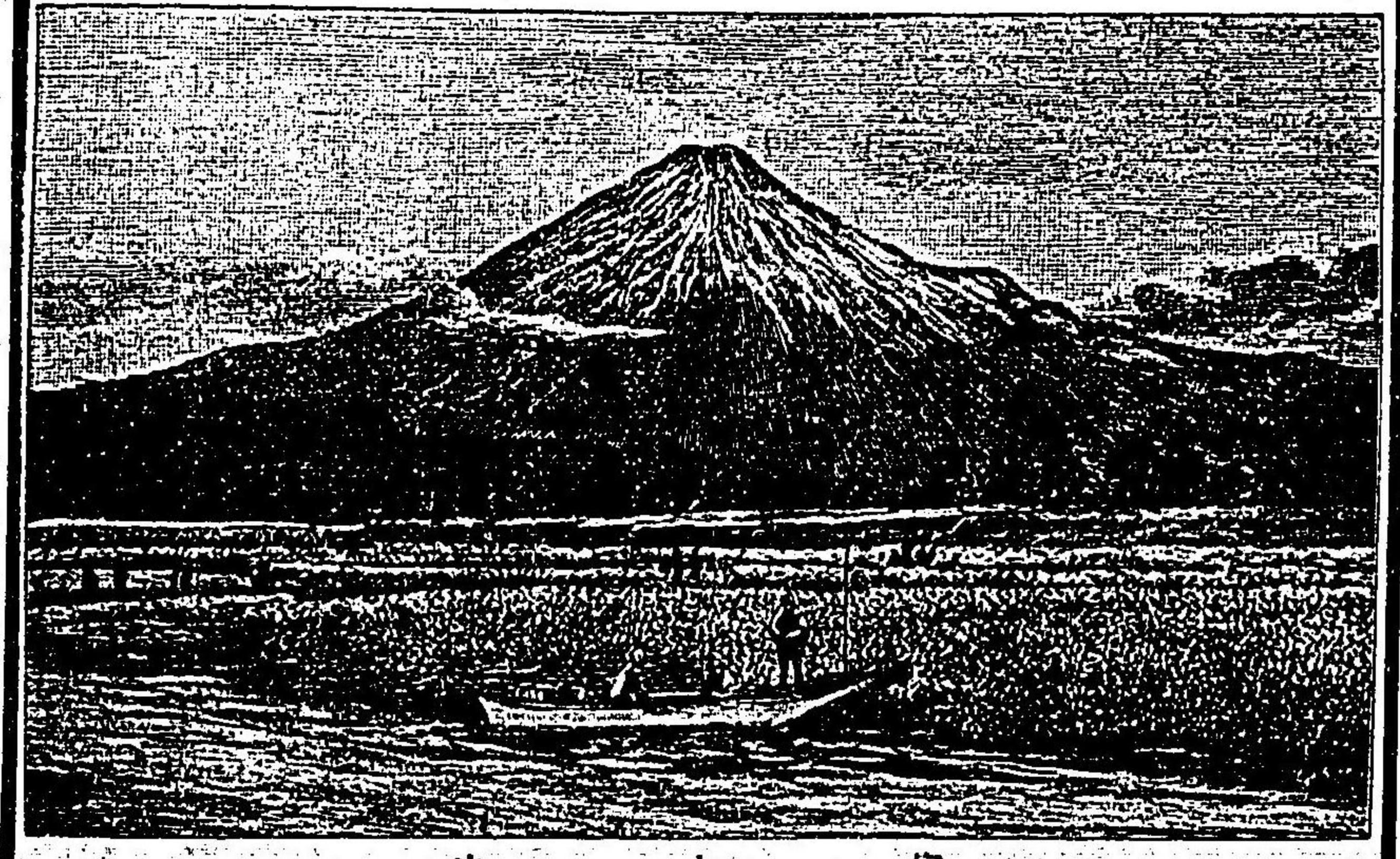
牧場あり。但小金が原の如きは、近年開墾して、田圃となりたる所多し。濃尾の平野の本道に屬する部分は、たゞ尾張一國のみなれば、其の廣袤、素より關東八州の平野には及ぶべくもあらざれども、地味肥えて、農産物に富めることは、前者に劣らず。

●山誌。本道には、三條の大山脈ありて、中央なるは、富士帶、富士帶の東なるは、關東山脈、西なるは、赤石山脈なり。

富士帶は、前にもいへるが如く、火山脈にして、南北に連り、其の主嶽を富士山とす。其の高さ一萬二千三百七十尺、中腹に突起するを寶永山といふ。富士山は、實に本邦第二の名山にして、四時雪を戴き、東海の表に屹立し、或は朝日の映る所、或は暮雲の翳く所、其の風色いふべからず。されば、古より詩に吟じ、歌に詠じて、又繪畫に寫し、我々日本人の雅賞して、措く能はざるのみならず

ず、日本の富士といへば、天下の人、皆之を知り、其の名山と共に高し。富士帶に屬する著名の山嶽は、北に在るものを甲斐の八岳とし、南に在るものを駿河の愛鷹山、相模の箱根山、伊豆の天城山とす。

關東山脈は、武藏の西北隅なる秩父山より起り、南走して小佛峠となり、甲斐、相模の國界を爲す。此の山脈には、高山大嶽なし。赤石山脈は、紀伊山脈の伊勢の海によりて、一旦陷落せるもの、三河の



富士山

海濱にて再び隆起し、東北に向ひて走るものにて、遠江の秋葉山に連り、駿河、信濃の國界を爲し、此の山脈の主嶽なる赤石山となり、それより北に向ひて走り、信濃の諏訪湖に至り、富士帯に會ふて止む。赤石山は、其の高さ一萬二百尺餘、富士山に次ぐ高山なり。

右の外、本道にて著名なる山嶽は、伊勢と近江との界に鈴鹿峠あり、尾張の平野に小牧山あり。小牧山は、其の昔、羽柴徳川の兩雄對陣せし所なれば、最も名高し。甲斐の天目山は、武田勝頼討死の古跡を以て著れ、身延山は、日蓮宗の總本山を以て世に知らる。相模の大山、武藏の武甲山、安房の鋸山上總の鹿野山は、孰れも名高く、常陸の筑波山は、古歌にも詠ぜられて、特に名高し。

水誌。前に述べたるが如く、本道の地勢は、北の方高くして、南

川

に向ひ、次第に傾斜するを以て、河水は概ね源を北方に發し、南流して太平洋に入る。數多の河の中、最も灌漑運漕の便あるものを利根川とす。

利根川は、坂東第一の大河なれば、一に坂東太郎と稱す。源を上野の利根岳に發し、數多の支流を合せ、中田(下)栗橋(武藏)の間に至りて、二派に分れ、本流は、權現堂川と稱し、關宿に至りて、江戸川を分派す。江戸川は、南流して、東京灣に入る。本流は、關宿より、更に逆川と稱し、中田栗橋の間にて分派せし赤堀川を合せ、東南に流れて、鬼怒川、小貝川を合せ、布佐村に至りて、手賀沼の水を合せ、東流して、印旛沼、霞浦等の水を合せ、銚子に至りて、海に入る。河源より中田栗橋の間までを上利根といひ、それより布佐村までを中利根といひ、それより下流を下利根といふ。本流の長さ七

十二里、下流の濁さ七丁より二十五丁に至り、其の流域、上野、下野、武藏、下總、常陸の五國に跨り、舟筏を通ずること二百二十里、舟運灌漑の便あること、本邦の諸川に冠たり。

利根川の外、本道の重なる川は、伊賀に木津川の上流なる伊賀川、名張川あり、伊勢に宮川、櫛田川、雲出川あり、尾張に庄内川、及び木曾川の下流なる鍋田川、佐屋川等あり、三河に矢矧川、豊川、及び矢矧川の支流なる大平川の三川あり。三河の國名の因りて起れる所なり。遠江に天龍川あり。源を信濃の諏訪湖に發し、南流して遠江に至り、下流は二派に分れ、掛塚に至りて、海に入る。遠江、駿河の界に大井川あり。昔は橋梁の設なく、人の肩に跨り、又は蓮臺に乗りて渡りたるが、今は天龍川と共に長大なる橋梁ありて、交通自在なり。駿河に安倍川、富士川あり。富士川は、源

湖沼

を信濃の釜無山に發し、南流して甲斐に入り、釜無川といひ、笛吹川、蘆川等を合せ、駿河に至りて、海に入る。其の流れ急にして、羽前の最上川、肥後の球摩川と共に日本三急流の稱あり。相模に酒匂川、馬入川あり。馬入川の上流は、甲斐の桂川なり。桂川に架け渡せる橋を猿橋といふ。橋代を用ひず、兩岸より大木を累ねて、橋を支へ、最も奇巧なり。武藏に多摩川、荒川あり。多摩川は、下流を六郷川といふ。水清ければ、引きて東京市中の飲料とす。之を玉川上水といふ。荒川は、下流を隅田川といひ、東京を過ぎて海に入る。隅田川の左岸は、櫻の名所にて、之を向島といふ。常陸に筑波川、那珂川、久慈川あり。那珂川は、源を下野に發し、常陸の湊村に至りて、海に入る。

本道の湖沼の中、其種類の低地湖に屬するものは、下總、常陸の

温泉

海岸

地に多し。即下總に印旛沼、手賀沼、常陸に霞浦、北浦、涸沼、牛久沼等あり。其中霞浦は、周回三十六里、琵琶湖に次ぎて、本邦第二の大湖なり。又火口湖は、富士山の近傍に多し。箱根山中なる蘆湖は、水清く、境幽にして、湖畔に離宮あり。其の水、流れて早川となる。富士の北麓には、川口、山中等の六湖あり。又愛鷹山の南麓には、富士沼あり。以上を合せて、富士の八湖と稱す。

富士帯に屬する地方は、温泉甚だ多し。其中、最も著名なるは、箱根七湯、伊豆の熱海なり。熱海の温泉は、噴出すること、晝夜三回、曾て其の時を違へず。かゝる温泉を間歇泉といふ。我が國には稀なる温泉なり。

●海岸。本道は、太平洋に瀕して、海岸線の屈曲甚しく、數多の海灣岬角を爲し、良港乏しからず。

志摩は、其の南に御座崎、麥崎、大王崎ありて、北に鳥羽港あり。港外の一島を答志島といひ、此の島と三河の伊良胡崎とは、一の海口を爲して、其の内を伊勢の海といふ。此の海は、伊勢、尾張の二國にて相擁し、沿岸大約三十里、伊勢に津、四日市、桑名、尾張に熱田等の港あり。殊に四日市は、船舶の出入最も繁し。又伊勢の海岸には、阿漕浦、二見浦等の勝地あり。伊勢の海の東なる兩灣を渥美灣、衣が浦といひ、衣が浦に武豊港あり。

志摩の大王崎より、遠江の御前崎に至るまで、三十三里許の間を遠州灘と稱す。波濤荒くして、本邦の沿海中、航行の最難所とす。其の北岸に濱名灣あり。此の灣は、東西二里餘、南北三里餘古は湖なりしが、明應年間、海嘯の爲に湖口決して、灣となれり。其の湖口を今切といふ。

伊豆は、本道の大半島にして、遠く南方に突き出づること十四五里、國名の因りて起れる所なり。其の南端を石廊崎といふ。石廊崎と、遠江の御前崎との間、一灣を爲し、沿岸大約四十里、之を駿河灣といふ。正面に富士山聳立し、田子の浦、三保の松原等の勝地ありて、風景最もよし。松原の北灣に清水港ありて、船の出入繁し。

伊豆七島

伊豆の南海に十餘の島嶼ありて、重なる島を大島、利島、新島、神津島、三宅島、御倉島、八丈島とす。之を伊豆七島といふ。中に就き、大島、八丈島最も大なりとす。各周回十里餘、大島には、活火山ありて、之を三原山と名づく。此の島は、昔源爲朝の配流せられし所にして、最も名高し。八丈島は、名高き八丈絹の産地にして、こゝにも西山と稱する活火山あり。御倉島と八丈島との間に、

黒潮の最も急流なる所ありて、之を黒瀬川といひ、舟人の大に戒心する所なり。

相模の東南隅なる半島を三浦半島といひ、其の南端を三崎といふ。其の前に横はれる城が島と、相模の眞鶴崎との間は、大約十一里、之を相模灘といふ。其の沿岸に鎌倉、江の島、大磯、小田原等の地あり。

安房、上總は、一大半島を爲し、之を房總半島と名づく。房總半島には、安房の洲崎、野島崎、上總の大東崎等あり。洲崎と三崎とは、一の海口を爲し、其の間、大約四里、其の内を東京灣とす。東京灣は、沿岸大約五十餘里、上總の富津岬と相模の觀音崎との間は、大約二里、灣内の最も狭き所とす。こゝに數坐の砲臺海堡ありて、内海の咽喉を扼す。東京灣は、諸川より吐出す泥砂、次第に堆

積して遠淺なれども、尙西邊に浦賀、横須賀、横濱、東邊に館山、北條、木更津、北邊に品川等の舟泊地あり。凡て我が國の海灣中、内外の船舶輻湊して、海上の繁盛なること、此の灣に若くものなし。

安房の東南一帶の海を房州沖といひ、大東崎より下總の飯岡村まで、十五里の間を九十九里の濱といひ、下總の大吠崎以北、常陸の鹿島郡の海上を鹿島浦といふ。是れ等の海は、漁獵の盛に行はるゝ所なり。特に九十九里の濱は、有名なる鱧の漁場なり。

氣候。本道は、東西に長く、南北に短きを以て、緯度の高低より生ずる氣候の差は、少けれども、南は太平洋に面して、黒潮の暖流を帯び、北は高山峻嶽を以て掩はるれば、土地の高低、海の遠近によりて、差異なきを得ず。然れども、山地を除く外は、概して温和なる氣候といふべし。

氣候

物産

産物。本道の重要なる産物は、武藏の米、麥、安房、上總、下總の乾鱧、安房、上總の鯉節なり。是れ等は、價額の最も大なるものなり。又遠江、駿河の茶は、専ら外國へ輸出するものにして、是れ亦重要な産物なり。又織物は、甲斐の郡内、武藏の八王子、秩父にて織出す絹物、及び尾張の鳴海、絞、三河の木綿、下總の銚子縮等、産額多く、需用廣し。其の外、伊勢の菜種、萬古燒、尾張の瀬戸燒、名古屋の七寶燒、扇子、静岡の漆器、竹細工、甲斐の葡萄、伊豆の石材、箱根の湯本細工、東京の靴、西洋紙、摺附木、蒔繪細工、鼈甲細工、錦繪、淺草海苔、下總流山の味醂、野田、銚子の醬油、常陸の煙草等を重なる産物とす。

處誌。伊賀は、山間の小國にして、著き都會なく、たゞ伊賀越の通路に當る上野を名邑とす。此の地は、昔有名なる劍客荒木又

伊賀

伊勢

右衛門村光が、渡邊數馬に助太刀して、親の仇河合又五郎を打たしめたる所なり。世に之を伊賀越の仇打といふ。

伊勢の津は、三重縣廳の所在地にして、人口殆ど四萬、藤堂家の舊城地にして、伊勢第一の大都會なり。伊勢の南なる宇治に、天照皇大神の宮ありて、之を内宮といひ、山田に、豐受大神の宮ありて、之を外宮といふ。諸方より參拜する者夥し。伊勢には、此の外に、四日市、桑名、松坂等の名邑あり。

志摩

尾張

志摩は、海に臨める小國にして、南に、的矢港、北に、鳥羽港あり。

尾張の名古屋は、徳川三家の一なる尾州家の舊城地にして、愛知縣廳、こゝに在り。此の地は、京都に次ぐ大都會にして、人口二十萬餘、市街は、熱田に連り、市中に七寶燒、扇子、織物、綿絲等の製造所あり。此地は、兩京の中間に位し、交通便利なれば、人口増殖し

て、益繁盛に赴く勢なり。市街の北端に、有名なる名古屋城あり。城上の統は、金色燦爛として輝き、本道第一の名物なり。城内を第三師團司令部の本營とす。熱田には、熱田神宮あれば、單に宮とも稱す。尾張の國は、昔織田信長公の領せし國にして、其の居城なる清洲は、名古屋の西北數里に在り。又國の西部に、長湫桶狹間の古戰場あり。

三河

三河の國は、徳川家康公勃興の地なり。其の岡崎は、公の居城にして、今も尙盛なる一都會なり。豊橋は、豊川の下流に在りて、岡崎に次ぐ一名邑なり。

遠江

遠江の濱松は、此の國第一の都會にして、其の北に三方原あり。武田信玄の攻め來りし時、徳川家康の防禦して、苦戦したる所なり。

駿河

駿河の静岡は、古國府のありたる地なれば、元は府中又は駿府と稱せしが、明治元年に、今の名に改まりたり。此の地は、静岡縣廳のある所に於て、人口殆ど四萬、繁華なる一都會なり。漆器、竹細工等を名産とす。其の東南なる久能山には、東照公の廟社あり。沼津は、静岡に次ぐ繁華の地なり。駿河の西隅なる焼津の地は、古焼津と稱し、日本武尊の東夷を征せられし時、危難を蒙り給ひし所なり。

甲斐

甲斐の國は、四面とも高山峻嶽を以て廻らし、中に甲府の一平原あり。此の地勢は、即國名の起原にして、かひとは、山間の義なり。國の東部なる都留郡は、郡内と稱し、養蠶製絲、盛に行はれ、有名なる甲斐絹の産地なり。甲府は、山梨縣廳所在の地にして、人口三萬餘、此の國第一の都會なり。甲斐は、昔武田信玄の領地に

伊豆

して、其の館趾は、甲府の北なる躰躰崎に在り。

伊豆の國は、富士帶の中に在れば、熱海を始め、修善寺、湯島等の温泉場甚だ多し。下田は、有名の良港にして、國の南端に在り。三島は、繁盛なる宿驛にして、國の北隅に在り。三島の南に韭山、北條あり。共に此の國の名邑なり。

相模

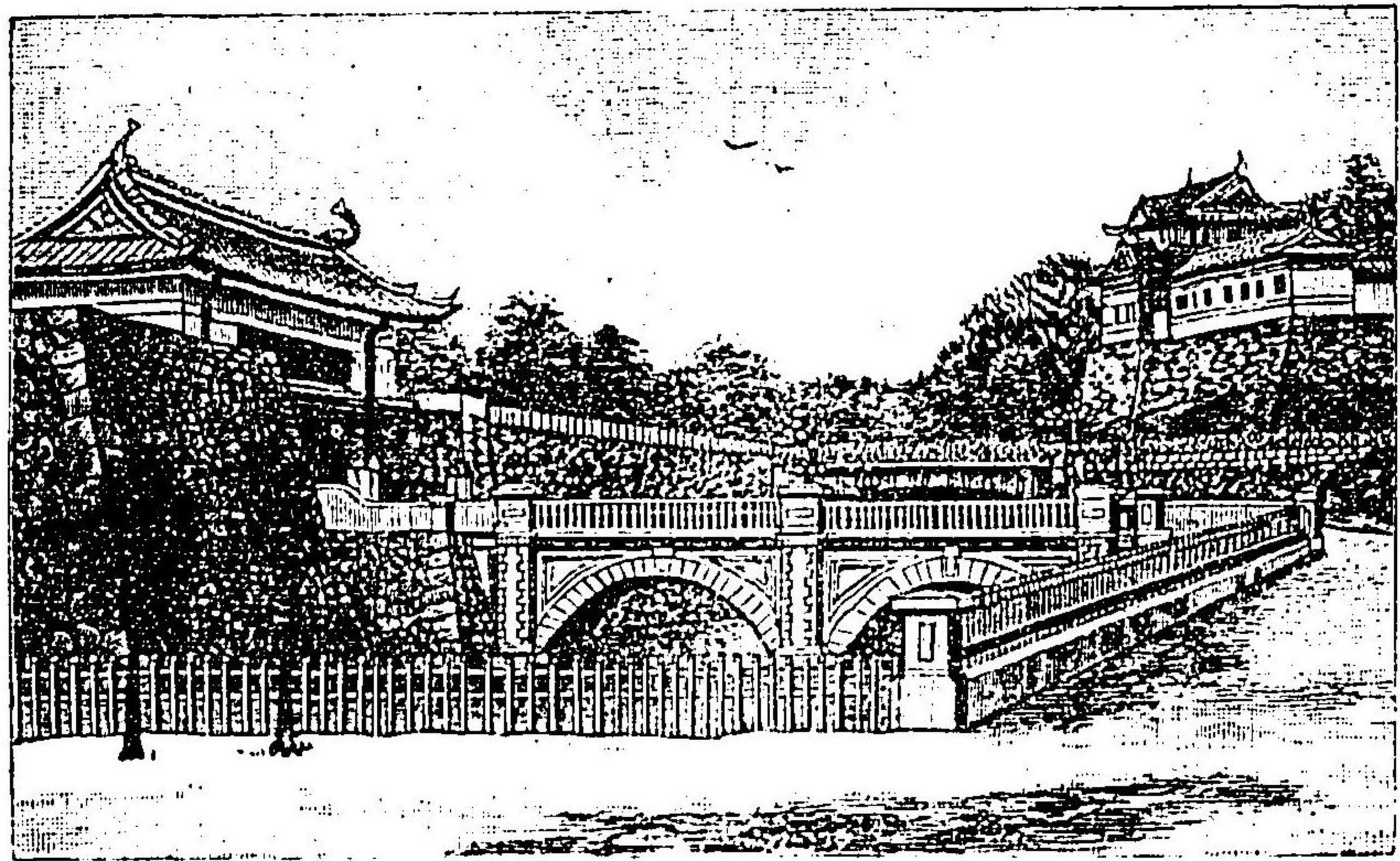
相模の小田原は、昔北條氏五世の城地にて、今も尙此の國の名邑なり。三浦半島の横須賀は、我が國の重要な軍港にして、横須賀鎮守府の所在地なり。港口及び其の附近なる猿島、夏島等に、砲臺を築き、軍港の守備に備ふ。鎮守府の所屬なる造船所は、慶應元年に、徳川幕府の創設せしものにして、今は益盛大となり。其の南に、浦賀港あり。抑相模の國は、源家の遺跡甚だ多く、先づ第一に、鎌倉は、頼朝卿の幕府を開きし所に於て、こゝに遊ぶ

武藏

東京

者、誰れか往事を追懷せざらん。其の他、賴朝卿が、旗揚げしたる石橋山、三浦、大介義明の討死したる衣笠城の舊趾、又は新羅三郎義光の簫を吹きたる足柄山等あり。

武藏の國は關東八州の平野の大部分を占め、多摩川、荒川等の諸川環流して灌漑運漕の便よく、地味肥沃にして、農産物饒なり。東京は、我が國の首府にして、荒川の下流に在り。市街は、東西三里、南北四里、麴町神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤阪、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川の十五區に分れ、人口百二十四萬餘、東洋一二の大都會なり。市の中央に宮城ありて、其の周圍に諸官省、兵營、國會議事堂等あり。日本橋、京橋等の區を下町と稱し、牛込、小石川等の區を山、手と稱す。山、手は、概ね宅地にして、下町は、商業地なり。日本橋區の日本橋近傍、京橋區の銀座通、及び神田區



宮城二重橋

等は、商業最も繁盛なり。東京は、工業も亦盛に行はる。靴、西洋紙、摺附木等は、一か年の産出價額最も大なるものにして、又著名なるものは、蒔繪細工、鼈甲細工等なり。東京は、獨商工業盛なるのみならず、實に我が國文化の中心なれば、大學、中學、其の他各種の専門學校、博物館、圖書館等備らざるはなし。市の内外には、遊覽の地乏しからず。上野、淺草、芝、或は、櫻の名所なる向島、飛鳥山、紅葉の名所なる瀧

の川等あり。かく繁華なる東京の地も、昔は武蔵野の一隅にして、草澤卑濕相連り、沙漠たる荒原なりしが、今より七百年前、江戸太郎重長といふ人、此の地を領し、其の後、太田道灌、今の宮城の地に城を築く。其の後、北條氏之を領せしが、北條氏亡びて、徳川幕府の居城となるに及び、江戸の繁華、年々に増せり。既にして明治元年、詔して東京と改め給ひ、尋で乘輿東臨せられ、遂に我が國の首府とばなりたり。

横濱

横濱は、東京を距ること八里、關東の諸港中、樞要の位置を占め、外國貿易の盛なること本邦第一なり。其の重なる輸出品を蠶絲、茶、絹のハンケチ、銅等とす。中にも蠶絲と茶との二種は、本邦輸出品中、重要なるものなれば、其の盛衰は、以て全國の貿易いかんを知るに足る。又重なる輸入品を綿絲、砂糖、羅紗、石油等とす。

此の地は、元海濱の一漁村なりしが、安政六年開港後、人口年々増加して、今は十六萬餘の多きに達し、陸は瀛車の往來繁く、港は、内外の瀛船出入し、頗る繁榮を極む。此の地に神奈川縣廳あり。浦和は、埼玉縣廳所在の地にして、東京を距ること西北六里に在り。八王子は、甲州街道に當る一名邑にして、絹物の産地なり。其他、川越、熊谷等は、皆武蔵の名邑なり。

安房

安房は、房總半島の南端に位する小國にして、北條、館山等の名邑あり。其の外洋に面する小湊の誕生寺は、法華宗の開祖日蓮上人誕生の地なるを以て、信徒の參詣する者多し。

上總は、房總半島の北部に位し、東に一宮、東金、西に木更津等の名邑あり。其の山邊郡は、法華宗の寺院多く、此の地方を俗に「上總の七里法華」と稱す。

上總

下總

下總は、大なる都會あらざれども、名邑甚だ多し。千葉は、千葉縣廳所在の地にして、其の外、船橋、佐倉、佐原、銚子、古河、結城、關宿、又は醬油の名産ある野田、味噌の名産ある流山、不動を以て著れたる成田等の地あり。

常陸

常陸は、東海道の東隅に在りて、國中第一の都會を水戸とす。此の地は、徳川三家の一なる水戸家の舊城地にして、有名なる水戸、黄門、光圀、卿、こゝに居住せり。今も人口三萬餘ありて、茨城縣廳の所在地なり。此の外、湊、太田、笠間、土浦等の名邑あり。鹿島郡の鹿島神社は、關東隨一の古社にして、最も有名なり。又磐城界なる勿來、關の故趾は、八幡太郎義家の詠歌を以て有名なり。

小笠原島

小笠原島。小笠原島は、太平洋の波利尼西亚の部に屬し、伊豆の南海二百里に在り。父母、兄弟、姉、妹、姪、甥、媳、媒等の諸島三十餘

七十

ありて、最も大なるを父島(周回十
五里餘)、母島(周回十
里餘)とす。此の諸島を

父島群島、母島群島、聳島群島の三部に分つ。父島の二見港は、碇泊に便なり。港の沿岸なる大村に小笠原島廳あり。小笠原島は、其人口凡て一千四百、氣候熱くして、信天翁、大蝙蝠、椰子、鳳梨、露兜樹等、珍奇の動植物あり。内地へ輸出する重なる産物は、梭欄、牛、木耳、桑材、蠟、龜等にして、近年綿、甘蔗、山藍の栽培盛に行はる。

又近海は、種々の水産物に富む。此の諸島は、文祿年間、小笠原貞頼の發見せしものなるが、久しき間、移住人なかりし故、無人島と稱せり。然るに天保年中、始めて移住せしは、伊太利、及び英、米等の人なりしかば、文久年中より、明治八九年の頃まで、英、米等の公使、所屬の權理を争ひしが、我が政府、之を論破せしより、再び異説を唱ふるものなく、明治十三年、東京府の管轄となり、同十五年、こ

こに住する外國人、盡く歸化して、我が民籍に入りたり。
小笠原島の南に當り、北緯二十四度より、同二十五度三十分の
間に、三島嶼あり。中央なるを硫黄島といひ、其の南なるを、南硫
黄島といひ、其の北なるを北硫黄島といふ。此の諸島は、未だ無
人島なるが、明治二十四年、我が版圖に入りて、小笠原島の所屬と
なりたり。

東山道。

汎論

汎論。東山道は、畿内の東北に位して、面積の廣きこと一畿八
道に冠たり。其の中に、近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸
前、陸中、陸奥、羽前、羽後の十三國あり。近江以下の六國は、東海、北
陸兩道の間、に挾まりて、海なき國々なり。此の諸國の中、飛驒と
下野とを除き、其の他は、京都より東京に至る街道に當り、其の街
道を昔より中山道と稱する故、遂には此の六國を總稱して、俗に
中山道といふ。又磐城以下の五國は、もと陸奥と稱し、羽前、羽後
の二國は、もと出羽と稱せし故、今も總稱して、奥羽といふ。奥羽
の地は、岩代を除く外、皆海に臨む。本道の十三國は、現今左の如
く十一縣にて管轄す。

近江。

滋賀縣。

美濃飛驒

岐阜縣

七十四

信濃

長野縣

上野

群馬縣

下野

栃木縣

磐城の中央部以南十一郡及び岩代

福島縣

磐城の北部三郡及び陸前の殆ど全部

宮城縣

陸前の北部一郡陸中の殆ど全部

岩手縣

陸奥の南部一郡

陸奥の殆ど全部

青森縣

羽後の南部一郡及び羽前

山形縣

羽後の殆ど全部及び陸中の北部一郡 秋田縣

地勢 中山道は山多くして平野少き地方なり。特に飛驒信

地勢

濃の如きは支那山系と樺太山系との接合點に當れば高山大嶽打重り平地と雖海面を抜くこと一千尺乃至二千尺に達す。平野は濃尾平野と關東八州の平野との北部のみ稍廣くして其の他は山間湖邊に僅の平野あるに過ぎず。奥羽も山嶽多けれども海岸河邊の地往々廣き平野あり。中にも陸前の平野の如きは最も大にして有名なる米の産地なり。

山誌

山誌 本道著名の山嶽を舉ぐれば先づ樺太山系に屬する北上山脈には陸中の六角牛山早池峯山等あり。阿武隈山脈には磐城岩代の界なる靈山磐城の關伽井嶽等あり。

中央火山脈の著名なる山は陸奥の恐山陸中の岩手山陸前陸中羽後の三國に跨る駒岳磐城の刈田岳岩代の磐梯山下野の那須岳日光山上野の赤城山榛名山妙義山信濃上野の界なる淺間

日本地誌 各道誌 東山道

七十五

山等なり。又鳥海火山脈の著名なる山は、陸奥の岩木山、羽後の鳥海山、羽前の月山、信濃、上野の界なる白根山等なり。是れ等の諸山の中、恐山、磐梯山、那須岳、淺間山は、活火山にして、其の他は熄火山なり。

美濃、飛驒山脈の著名なる山は、飛驒、信濃の界なる乗鞍岳、御岳、美濃、信濃の界なる恵那山等なり。御岳の東南一帯の地は、木曾の山林にして、檜、樺等の良材に富む。又有名なる猛將木曾義仲は、此の山間にて成長せり。

右の外、本道著名の山嶽は、近江八景の一なる比良山、一位の名木を以て名高き飛驒の位山、中山道の通路に當る信濃の和田峠、月の名所なる同國の姨捨山、鏡臺山、日本武尊の故事を以て名高き信濃、上野の界なる碓氷峠、新田義貞朝臣の居城ありたる上野

川

の金山、昔聖武天皇の時、黄金を採掘して貢せりといひ傳ふる陸前の笹嶽等なり。

水誌。本道は、概ね中央の地高きを以て、中央火山脈等の諸山、分水界となり、中山道の諸水は、南北に分流し、奥羽の諸水は、東西に分流す。

中山道の諸水は、木曾川、千曲川、利根川等を重なるものとす。

木曾川は、源を信濃の木曾山中なる鉢覆山に發し、山谷の間を流れ、美濃に入りて、飛驒川、長良川、揖斐川等を合せ、南流して、伊勢の海に入る。此の川、上流は、谷川にして、急流なれば、舟運の利少けれども、兩岸の風景、甚だ奇なり。中流以下は、流緩にして、舟運の利あり。長良川は、鮎の産すること多く、長良川の鵜飼とて、其名、世に著る。揖斐川は、夏秋の際、屢水害を起すことあり。千曲

川は源を信濃の東南隅なる國師嶽に發し、北流して、犀川を合せ、越後に入りて、信濃川といふ。舟運の利少けれども、灌漑の利多し。犀川の千曲川に會する所は、川中島と稱し、有名なる武田上杉の古戰場なり。利根川は、源を上野の利根岳に發し、吾妻川、烏川等、上野全國の水を合せ、南流して下總に入る。舟運灌漑の利、共に大なり。

奥羽の諸水は、阿武隈川、北上川、最上川等を重なるものとす。阿武隈川は、源を磐城の西南隅なる阿武隈山より發し、岩代を貫流して、再び磐城に入り、白石川を合せ、東流して太平洋に入る。舟運の利少けれども、灌漑の利多し。北上川は、源を陸中の北なる北上山より發し、數多の支流を合せて、南流し、陸前に入りて、迫川、玉造川等を合せ、下流は、二派に分れ、本流は、石巻の港に至りて、

海に入る。其の長さ七十六里餘、流緩にして、河中に岩石少く、支流を合算する時は、舟筏を通ずること百七十里餘に達し、舟運の便あること、利根川に次ぐ。且此の川は、其の長さに比ぶれば、水害の少きこと、全國に冠たり。最上川は、源を羽前の南隅なる大日岳に發して、北流し、下流は西流して、羽後の酒田港に至り、海に入る。此の川は、日本三急流の一にして、舟運の利少し。

右の外、本道著名の川を擧ぐれば、飛驒の宮川、高原川は、合して越中に入り、神通川となり、信濃の天龍川は、遠江に入り、下野の鬼怒川は、利根川に入り、那珂川は、常陸に入り、岩代の日橋川は、越後に入りて、阿賀野川となる。陸前には、鳴瀬川ありて、太平洋に入り、陸奥には、馬淵川、岩木川ありて、前者は太平洋に入り、後者は、日本海に入る。羽後には、御物川、能代川ありて、共に日本海に入る。

本道の湖水は、近江に日本第一の琵琶湖あり。周回大約六十里、竹生島、沖島等ありて、湖邊に近江八景の勝あり。富士山と並へ稱して、我が國の双美とす。琵琶湖の北なる一小湖を余吾湖といふ。兩湖の間なる賤岳は、七本鎗の戦功を以て世に著る。天龍川の水源なる信濃の諏訪湖、日光山中の中禪寺湖、岩代の猪苗代湖は、孰れも風景美なり。陸前には伊豆沼、品井沼等、數多の湖沼あり。陸奥には十和田湖、十三瀉、小川原沼等あり。小川原沼は、開鑿して港となさは、良港となるべしといふ。羽後には八郎瀉、田澤沼、大沼等あり。大沼は、西村山郡に在り。湖中に浮島ありて、屢其の位置を變ず。

本道は、火山脈連互するを以て、温泉の涌出する所甚だ多く、其の最も著名なるは、上野の草津、伊香保、下野の湯本、那須、摺原等に

して、夏時には、浴客群集し、孰れも繁華なり。

●海岸。本道の海に瀕する地は、奥羽の地方のみなり。其の太平洋に瀕する海岸は、陸前の牡鹿半島、東南に向ひて斗出し、其の岬端の一島を金華山といふ。半島の東に女川灣あり、半島の西に石巻灣あり。女川灣は、水深くして碇泊に便なり。石巻灣の内、萩濱、石巻、野蒜の諸港あり。萩濱は、漁船の出入最も繁き港なり。灣の西隅なる松島は、日本三景の一にして、風色絶佳なり。陸中には釜石、山田、宮古の數港あり。陸奥は、東に田名部半島、西に津輕半島あり。兩半島の外面には、尻屋崎、大間崎、龍飛崎等の諸岬あり。内面には、一大灣を抱き、之を陸奥灣といふ。灣の南邊に青森、野邊地の二小灣あり。日本海に瀕する海岸は、屈曲少く、たゞ羽後の男鹿半島ありて、其の内は、即八郎瀉なり。能代、土

崎、酒田の三港を重なるものとす。日本海中の一孤島を飛島といひ、羽後に屬す。

氣候

●氣候。中山道諸國の中、飛驒、信濃は、土地一体に高きを以て、寒氣強く、諏訪湖の如きは、嚴寒に至れば、全面堅氷と結び、人馬其上を往來す。然れども、近江、美濃、上野、下野の平野は、一般に溫暖なり。奥羽は、寒氣強けれども、東西によりて、稍異なり。東は親潮の影響を受け、西は、對馬海流の影響を受くるを以て、同緯度の地にても、前者は後者より、寒氣稍強し。然れども、降雪は、却て羽後の秋田邊を多しとす。

産物

●産物。本道は、養蠶の盛に行はるゝ地方にして、外國貿易の第一位を占むる蠶絲は、多くは本道より産出す。其の中、最も多く産出する地は、上野、信濃の二國にして、これに次ぐ地を岩代、近江、

美濃とす。かく蠶絲の産出多ければ、隨て絹帛の製造盛に行はる。即近江の濱縮緬、信州紬、上野の桐生、伊勢崎、下野の足利等より織出す諸絹物、陸前の仙臺平、羽前米澤の絲織、秋田の畝織等、最も著名なり。

本道は、鑛山多くして、種々の鑛物を出す。其の重なるものを舉ぐれば、下野には、足尾の銅、岩代には、半田の銀、陸中には、釜石の鐵、尾去の銅、小阪の銀、羽後には、阿仁の銅、院内の金銀等、最も著名なり。

本道には、著名なる山林多し。木曾は、檜、檜、楡、榎、杉、松を五木と稱し、樺を停止木と稱し、孰れも鬱蒼として繁茂す。又日光の檜、杉、田名部の檜は、共に良材と稱す。此の外、處々に山林ありて、年々伐出す木材極めて夥し。

奥羽は米の産出多し。特に陸前の平野は、稻田相望み、一年の産額、頗る大なり。又奥羽は、古より牧馬の盛なる地方にして、諸國共に牧養せざるはなく、陸軍省の軍馬成育所は、主として此の地方に在り。以て良馬の産出多きを知るべし。

右の外、著名なる産物を舉ぐれば、近江の蚊帳、晒布、美濃の米、紙、岐阜提灯、飛驒の一位細工、信濃の更科蕎麥、下野の日光塗、眞岡木綿、磐城の相馬焼、岩代の會津塗、會津蠟燭、陸前の埋木細工、陸中の鮭、陸奥の津輕塗、羽後の能代塗等なり。

近江

處誌。近江は、國の中央に琵琶湖ありて、重なる都會名邑は、概ね湖邊に在り。大津は、京都を距ること僅に三里、湖に臨みて、湖上漁船の往來繁く、又瀛車の便ありて、繁盛なる一都會なり。此の地に滋賀縣廳あり。彦根は、もと井伊家の城地にして、今も盛

なる一都會なり。安土は、昔織田信長公の天主閣を築きたる地にして、有名なる地なるが、今は一の村落に過ぎず。此の外、長濱、膳所、水口、八幡等を重なる名邑とす。抑近江の國は、昔帝都を置かせられたることあり。畿外の地にて、都趾の存するものは、ただ此の一國あるのみなり。又湖東の姊川は、昔織田徳川の二氏、浅井朝倉の兵を破りたる所にして、賤が岳と共に有名の古戰場なり。

美濃

美濃の國は、地味肥えて、有名なる米の産地なり。岐阜は、稻葉山に據り、長良川に臨み、岐阜縣廳の所在地なり。其の南なる加納の地は、市街相接す。大垣は、揖斐川の西に在りて、屢水害を蒙ることあり。大垣の西なる關が原は、昔徳川家康公が、石田三成の兵を破りたる古戰場なり。伊勢の界なる多度山に、有名なる

飛驒

養老の瀧ありて、山中頗る幽清なり。

飛驒は、全國山多くして、平地少く、たゞ國の中央に僅の平野ありて、こゝに高山の一都會あり。此の國には、もと藤橋籠の渡などありて、往來不便なりしが、今は大概板橋に改りぬ。

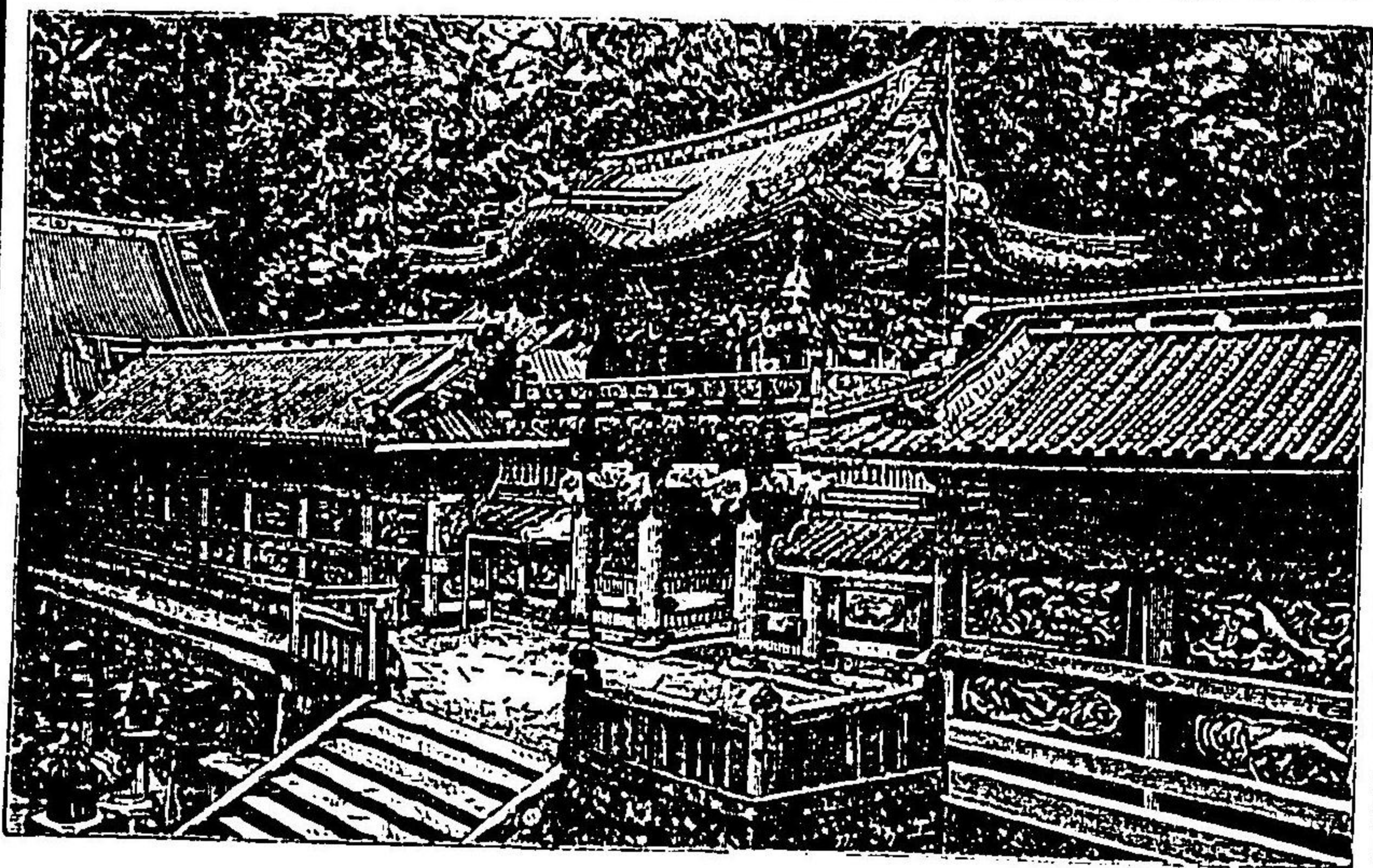
信濃

信濃の國も亦山多し。然れども、山間又は河邊に、往々數里の平野あり。普光寺は、信濃の北部に在り。此の寺は、有名の佛閣なれば、此の地の總稱となり、其の市街を長野町といふ。即長野縣廳所在の地なり。松本は、信濃の殆ど中央に在りて、繁華なる一都會なり。上田は、千山川の上流に在りて、是れも亦松本に劣らぬ一都會なり。此の外、飯田、上諏訪、小諸、松代等を重なる所とす。

上野

上野の前橋は、群馬縣廳所在の地なり。高崎と共に繁盛なる

下野



都會なり。桐生、伊勢崎の兩地は、有名なる機場にして、年々産出する織物夥しく、特に桐生を盛なりとす。又富岡には、盛大なる製絲場あり。此の外、館林、安中等を重なる所とす。

下野の宇都宮は、奥州街道の要路に當り、繁華なる一都會にして、栃木縣廳こゝにあり。足利は、上野の桐生と共に有名なる機場なり。栃木も亦重なる名邑なり。日光山は、宇都宮を距ること九里

餘其の山麓に家康公を祀れる東照宮の社あり。金銀を鑲め、彩色を施し、其の美麗なること類稀なり。山中に裏見霧降、華嚴等の瀧ありて、山水の風景甚よろし。有名なる足尾銅山は、上野界に在りて、年々採掘する量夥し。

磐城

磐城には、大なる都會なし。白河三春、榑倉、平、中村、白石等の地、稍著名なり。白河は、古勿來と共に關門のありたる所なり。

岩代

岩代の國は、阿武隈川の流域に、福島、二本松、郡山、須賀川等の都會あり。其中、福島最も盛にして、福島縣廳こゝに在り。會津は、猪苗代湖の西北地方の總稱にして、其の若松は、戊辰の役に、會津藩の籠城したる地なり。養蠶製絲の業は、掛田、桑折等の地、最も盛に行はる。

陸前

陸前の仙臺は、もと伊達家の城地にして、東京以北第一の大都

會なり。人口七萬七千、第二師團司令部、宮城縣廳、第二高等學校、控訴院等あり。此の外、陸前の重なる地は、石巻、萩、濱、涌谷、登米、氣仙沼等なり。

陸中

陸中の盛岡は、もと南部家の城地にして、今も尙盛なる一都會なり。岩手縣廳こゝに在り。其の外、黒澤尻、水澤、一關等は、皆北上川の流域に屬する名邑なり。平泉は、一關の北に在り。此の地は、昔藤原、秀衡の居りし所にして、其の建立せし中尊寺は、北上川の支流なる衣川の右岸に在りて、其の金色堂、最も名高し。衣川は、辨慶の立往生したりと傳ふる所にして、河邊に辨慶の墓あり。其の外、陸中には、陸奥の鎮守府、厨川等の故趾あり。

陸奥

陸奥は、本道の極北に在り。其の青森は、青森縣廳の所在地にして、青森灣に臨み、繁華なる一都會なり。弘前は、もと津輕家の

城地にして、今も盛なる都會なり。其の外、八戸、七戸、野邊地、田名部等を陸奥の名邑とす。

羽前は、最上川の流域に、米澤、山形、天童等の都會名邑あり。米澤、山形は、共に盛なる地にして、縣廳は、山形に在り。最上川下流の兩岸は、總稱して庄内といひ、庄内の一都會を鶴岡といふ。

羽後の秋田は、秋田縣廳の所在地にして、羽後第一の都會なり。其の外、酒田、本庄、土崎、能代、横手等を羽後の名邑とす。

北陸道

汎論。北陸道は、東山道の西北に位し、日本海に臨める一道にして、其の中に、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後の六國ありて、外に佐渡の一島國あり。地幅狹くして、廣き所も十里に過ぎず。長さは、百四十里餘あり。此の地方は、京都の北に當れる故、昔より北國の稱あり。各地とも、佛教信者の多き所なり。本道の七國は、現今左の如く四縣にて管轄す。

- 若狹、越前。 福井縣。
- 加賀、能登。 石川縣。
- 越中。 富山縣。
- 越後、佐渡。 新潟縣。

地勢。東南一帶の地は、高山峻嶽にて掩はれ、日本海岸に至る

に從ひ次第に傾斜す。故に其の地勢は全く東海道の反對なり。全道山嶽多けれども、海岸の地には往々平野あり。特に越後の信濃川下流の平野は、東北より西南に亘りて、其の長さ十餘里、幅六七里の間、稻田相連り、北國第一の平野なり。能登は、半島國にして、佐渡は、島國なり。共に山嶽多くして、平野少し。

山誌

山誌。東南一帶の山脈は、東に中央火山脈、鳥海火山脈連りて、西に中國山脈の餘派、及び白山火山脈連り、中央に富士帶、及び美濃飛驒山脈北部の諸山連る。是れ等の山脈中、著名なるものを舉ぐれば、若狹の西境に青葉山あり、越前の南境に荒島岳あり、加賀の南境に白山あり。白山は、其の高さ殆ど九千尺、山頂常に白雪を戴く。故に白山の名あり。白山の山脈北走して、加賀、越中の界に礪波山あり。其の下を俱利伽羅谷といふ。昔木曾義仲

川

が、平家の軍を押落して鑿にせし古戰場なり。能登には高洲山、寶立山等ありて、其の脈盡くる所を珠洲岬とす。越中の東南隅に立山ありて、白山よりも稍高し。山中の地獄谷といふ所は、常に烟を噴出す。立山の北に劍山あり、其の東北に蓮華山ありて、孰れも高峻なり。越後は、西に妙高山、燒山あり、南に三國峠、苗場山、守門岳等ありて、東に飯豊山あり。北の海岸には、彌彦山、米山あり。此の兩山は、甚だ高からざれども、海客の常に目標とする所なり。佐渡には、東教山、金北山等あり。

水誌。信濃川は、千曲川の下流にして、越後に入り、信濃川と稱す。沼魚川を合せ、平野の間を流れて、新潟に至り、海に入る。其の長さ八十八里、信濃界は、河中に岩石ありて、舟筏を通せざれども、河口より三十餘里の間は、舟運の利あり。之を本道第一の大

河とす。此の外、越前の日野川、九頭龍川、加賀の手取川、越中の庄川、神通川、常願寺川、黒部川、越後の阿賀野川等を重なるものとす。九頭龍川と神通川とには、もと有名なる船橋ありしが、今は共に木橋を架渡せり。

湖
本道の湖沼は、若狭の三方湖、佐渡の加茂湖を除き、其の他は、孰れも潟と稱し、謂ゆる海岸湖なり。其の重なるものは、越前の北潟、加賀の柴山潟、河北潟、能登の邑知潟、越後の鎧潟、福島潟等なり。本道は、若狭、佐渡の二國を餘き、其の他の諸國は、温泉あらざる所なし。其の中、最も名高きを能登の和倉とす。温泉、海中に涌出で、夏時浴客多し。

温泉
海岸
海岸。本道の海岸線は、其の屈曲、東海道の如くには甚しからざれども、能登半島を以て、一大屈曲を爲し、其の他、多少の屈曲あり。

り。先づ若狭は、松が崎、赤礁崎並び出で、其の内に、小濱灣あり。越前は、西南隅に敦賀灣ありて、灣頭に敦賀港あり。灣の西邊なる立石崎は、越前崎と遙に相對す。又北隅には、安島崎出で、其の蔭に三國港あり。加賀は、海岸線の屈曲少く、たゞ金石港を著名なりとす。能登は、東海岸屈曲多く、七尾灣最も大にして、其の南岸に七尾港あり。灣内の一島を能登島と稱す。北海岸に輪島港あり。珠洲岬は、危礁亂峙して、舟行危険の所なり。越中は、伏木、魚津等を名港とす。越中越後の界に當り、美濃飛驒山脈の盡頭に親不知の險あり。昔は旅客の危険を冒して通行せし所なるが、今は其の上に新道を開きたり。越後は、直江津、柏崎、寺泊及び新潟等の諸港あれども、海岸線屈曲少き故、皆碇泊に便ならず。佐渡は、東西に兩灣ありて、其の形、法馬に似たり。四隅の岬

角を矢岬、臺鼻、澤崎、濡木崎といひ、西の灣を眞野の入江といふ。島は、甚だ少く、能登島の外に、能登の舩倉島、七つ島、越後の粟生島等あるのみなり。抑日本海は、冬季北風烈しきを以て、一年の間、殆ど半は航海の便を缺く所なり。

氣候

氣候。本道は、南に山脈を控へて、北に日本海を帯び、亞細亞大陸の寒地を吹荒む寒風、眞一文字に吹付くるを以て、冬季は、寒氣甚しき筈なり。然れども、幸に黒潮の一派なる對馬海流、海岸に沿ひて流れ、寒氣を和ぐるが爲、世人の誤り傳ふが如き寒國にはあらず。但雨と雪との多きことは、本邦第一にして、雨の最も多き地方を加賀、能登、越中の諸國とす。又雪は、加賀の南部、越後の西部等、最も多くして、所によりては、二丈の深さに積ることあり。産物。本道の重要なる産物は、金と米となり。金は、古來佐渡

産物

の特産にして、佐渡の土といへば、金貨の異名となるに至れり。米は、處々より産すれども、其の最も多く産するは、越後なり。一年の收穫、二百萬石の上に出づ。米質は、よからざれども、産額の多きに至りては、本邦諸國中、第一に位す。

此の外、若狹の鯛、鯿、小濱塗、越前の奉書紬、奉書紙、加賀の加賀絹、象眼細工、九谷焼、能登の輪島塗、越中高岡の銅細工、富山の賣藥等、最も著名なり。越後は、織物の産出多し。越後縮、越後上布等最も名高し。

若狹

處誌。若狹は、沿海の地、港灣海角出入して、風色美なり。國中第一の都會を小濱とす。

越前

越前の福井は、古北莊と稱し、柴田勝家の居城なりき。今は福井縣廳として在りて、人口四萬餘、本道の重なる都會なり。武生

は古國府のありたる地なれば、元は府中と稱せり。鯖江、大野、勝山、三國等も亦著名の地なり。敦賀は、良港あるを以て、船舶の出入繁く、陸にも鐵道の設ありて、繁華なる地なり。此の國には、南朝の忠臣の遺跡多し。福井の西北なる牧野島村は、新田義貞朝臣の戦死せし所に於て、今其の地に朝臣を祀れる藤島神社あり。此外、杣山、金ヶ崎等、皆當時の歴史に關係ある地なり。又吉田郡の永平寺は、禪宗曹洞派の本山にして、有名なる大寺なり。

加賀

加賀の金澤は、もと本邦第一の大名前田家の城地にして、昔は繁盛なりしが、今は稍衰微せり。然れども、人口尙九萬ありて、北陸第一の大都會なり。石川縣廳、第五高等學校等あり。小松、大聖寺、松任等を此の國の名邑とす。

能登

能登は、大なる都會あらず。たゞ七尾、輪島の兩地を名邑とす。

越中

越中の富山は、神通川の東岸に在りて、人口五萬八千、北陸道屈指の都會なり。富山縣廳こゝに在り。此の地の賣藥商は、一畿八道至らざる所なし。高岡は、庄川の西岸に在りて、富山に次ぐ都會なり。

越後

越後は、本道第一の大國にして、其の長さ六十里に餘り、分ちて上越後、中越後、下越後とす。新潟は、五港の一にして、人口五萬餘、越後第一の大都會なれども、外國貿易は、未だ盛ならず。港も信濃川より吐出す土砂、年々堆積し、且北風を遮るべきものなければ、碇泊に便ならず。新潟縣廳こゝに在り。新潟の外、内地に在りては、高田、長岡、新發田、三條、村上等、海岸に在りては、直江津、柏崎、寺泊等を重なる所とす。

佐渡

佐渡の相川は、島の西岸に在りて、佐渡第一の名邑なり。夷町は、加茂湖に臨み、船舶の出入繁き所なり。此の國には、順徳天皇の山陵あり。

百

汎論

山陰道。

汎論。山陰、山陽の兩道を併せて中國といふ。中國は、一帯の山脈東西に連る。謂ゆる中國山脈、是れなり。本道は、此の山脈の北に當る故、山陰道とは稱するなり。本道は、東西の長さ大約八十里、南北の幅最も廣き所にて、大約二十里に過ぎず。此の中に、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見の七國ありて、外に隱岐の島國あり。此の八國は、現今左の如く一府及び三縣にて管轄す。

丹波の東北部五郡、及び丹後。 京都府。

丹波の西南部二郡、及び但馬。 兵庫縣。

因幡、伯耆。 鳥取縣。

出雲、石見、隱岐。 島根縣。

地勢。南は中國山脈に掩はれ、北は日本海に臨みて、其の地勢、

地勢

山誌

全く北陸道に同じ。但本道には、越後の平野の如き大なるものなく、たゞ海岸又は河邊に數里の平野あるのみなり。

山誌。中國山脈中、重なる山は、出雲の東南隅なる船通山、伯耆の南境なる蛭山、因幡の東南隅なる豹山、但馬の南境なる生野の銀山、丹波丹後の界なる大江山等なり。船通山は、簸川上に在りて、古名を鳥髮山といひ、須佐之男命の、八咫蛇を切りたまひたりといふ傳ふる所なり。生野は、有名なる鑛山にして、年々採掘する銀、及び金、銅、鉛、頗る多し。

中國山脈の北に傍ひて、東西に連る白山火山脈中、有名なる火山は、出雲石見の界なる三瓶山、伯耆の大山なり。大山は、本道第一の高山にして、殆ど六千尺、其の北に船上山あり。此の山、昔は船上山といひ、名和長年が、後醍醐天皇を守護し奉りて、立籠りた

川

る有名の山なり。其の外、此の火山脈に屬する山は、因幡の稻葉山、但馬の三開山、丹後の由良嶽等なり。但是れ等の火山は、凡て熄火山なり。

水誌。中國山脈は、殆ど中國の分水界を爲し、本道の諸川、皆北流して、日本海に入る。地幅狭きを以て、大河あらざれども、中國第一の川を郷川とす。郷川は、一に江川とも書き、又石見川とも稱す。源を安藝に發して、吉田川といひ、備後に入りて、三次川等を合せ、北流して石見に入り、西に折れて、日本海に入る。其の長さ五十里あれども、舟筏を通ずるは、其の半に過ぎず。其の外、丹後の由良川、但馬の城崎川、因幡の千代川、伯耆の日野川、出雲の斐伊川、石見の高津川等を重なるものとす。斐伊川は、一名を大川といふ。即古の簸川なり。

湖

温泉

海岸

出雲の宍道湖は、周回十餘里の淡水湖にして、斐伊川の水こゝに注ぐ。湖水は、東流して、大橋川となり、馬瀉の瀬戸を過ぎ、中海となる。中海は、周回十六里、中江海峽を以て日本海と相通ず。故に其の水鹹味あり。此の兩湖は、古は一つに連りて、意宇海といひしが、其の間次第に埋まりて、今は兩湖となれり。此の外、因幡の湖山池、伯耆の東郷池、出雲の神西湖等を著名なりとす。本道には、火山脈連るを以て、温泉の涌出する所少からず。其中、最も著名なるものは、但馬の湯島石見の温泉津等なり。

海岸。本道は、丹波の一國を除き、其の他の諸國は、皆海に瀕す。此の諸國の中、丹後と、出雲とは、海岸線の屈曲多けれども、其の他は、甚だ少し。丹後は、成生岬、鷲岬、東西相對して、其の内を與謝の海といひ、更に灣入して、舞鶴、由良、宮津の三港を爲す。舞鶴は、軍

港に撰定せられたる良港にして、宮津は、本道著名の港なり。宮津の北に當り、日本三景の一なる天の橋立あり。一條の砂洲長く海中に斗出して、青松林を爲す。其の狀、長橋を渡せるに似たり。丹後の北端を經岬といひ、其の海岸を西に進めば、久美濱港あり。但馬の津居山、因幡の加露、伯耆の米子も亦著名の港なり。米子の西北に斗出する砂洲を夜見が濱といひ、其の北端なる境港は、有名なる良港なり。出雲は、東に地藏鼻、西に日御崎、中央に多古鼻の諸岬ありて、沿岸の地、危礁亂峙し、舟行危險なり。地藏鼻の蔭に、美保關の一港あり。石見は、温泉津、濱田の諸港あり。其の沿海を總稱して石見瀉といふ。隱岐は、重なる島四つあり。中、島知夫島、西、島を島前といひ、他の一大島を島後といふ。島後に西郷港あり。

氣候

氣候。本道は、北陸道と共に日本海に臨みて、地勢も亦畧同じけれども、氣候稍溫暖にして、雨量も降雪も、北陸道より少し。

産物

産物。本道は、平野少く、地味も亦宜しからざる爲、農産物豊ならず。重なる産物を、鑛物及び牛とす。鑛物は、但馬の生野、石見の邇摩の銀、伯耆、出雲、石見の鐵等なり。牛は、全道の諸國、牧養せざるはなし。特に但馬、因幡は、最も盛なり。

右の外、本道著名の産物は、丹波の煙草、丹後の縮緬、但馬の柳行李、因幡の藍、白珊瑚、伯耆の木綿、出雲の人參、十六島海苔、宍道湖の鱸、石見の半紙、隱岐の板類等なり。

丹波

處誌。丹波の國は、四境山嶽にて取圍まれ、國內にも平地少し。龜岡、園部、福知山、篠山等を名邑とす。

丹後

丹後は、舞鶴、宮津等を名邑とす。

但馬

但馬は、豊岡、出石等を名邑とす。

因幡

因幡の鳥取は、もと池田家の城地にして、本道屈指の都會なり。鳥取縣廳、こゝに在り。

伯耆

伯耆は、本道の中にて、稍平野多き國なり。然れども、其の地味宜しからず。米子、境倉吉等を名邑とす。

出雲

出雲の國は、夙に我が古史に顯はれたる國なり。其の西北隅なる杵築に、出雲の大社ありて、大國主の神を祀る。此の社は、有名之の古社にして、四方より參詣する者絶えず。又此の社の大宮司千家氏は、出雲の國造の家筋にて、世間に稀なる舊家なり。松江は、大橋川の兩岸に跨り、市街繁榮にして、人口三萬五千餘、山陰道第一の都會なり。島根縣廳、こゝに在り。

石見

石見は、本道の最も西に在りて、其の名邑は、濱田、津和野を重なる

隱岐

るものとす。

隱岐は、出雲の沖に在りて、西郷港を重なる所とす。西島には、後醍醐天皇、行宮の舊跡あり、中島には、後鳥羽上皇の陵あり。

山陽道。

汎論

汎論。山陽道は、中國山脈を界として、山陰道と腹背を爲し、彼れを背とすれば、此れは腹なり。其の面積といひ、長さといひ、幅といひ、兩道畧相似たれども、山陽道は、畿内、四國、九州と相接して、交通の便利よく、氣候溫和にして、地味も亦宜しければ、其の發達せること、山陰道の遠く及ぶ所にあらず。本道には、播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門の八國ありて、現今左の如く四縣にて管轄す。

播磨。

兵庫縣。

美作、備前、備中。

岡山縣。

備後、安藝。

廣島縣。

周防、長門。

山口縣。

地勢

地勢。本道の諸國は、北に中國山脈を負ひ、南に向ひて次第に傾斜し、河岸又は海邊に平野あり。但長門は、他の諸國と異りて、中央の地稍高く、それより南北に向ひて傾斜し、河岸、海邊に平野あり。

山誌

山誌。中國山脈中の重なる山は、山陰道の條にて示せる如くなれば、今こゝに再説せず。其の支脈の南走するものは、甚だ多けれども、高山大嶽なし。其中、著名なるものを舉ぐれば、播磨に書寫山、白旗山あり。白旗山は、新田義貞朝臣の赤松則村を攻め圍みたる所なり。播磨、備前の界なる舟坂山は、兒島高德が、後醍醐天皇を奪ひ奉らんとて、御通盃を待ちたる所にして、備前の熊山は、高德が義兵を舉げたる所なり。備後の御神山は、奇石怪岩多く、鬼橋の如きは、最も奇觀なり。其の外、安藝の鷹巢山、周防

川

の方便山、長門の徳佐峯、鬼城山等を著名なりとす。

水誌。本道の諸川は、長大なるものなく、長きも三十餘里に過ぎずして、短きは、僅に十數里なり。是れ等の中に就きて、著名なるものを舉ぐれば、播磨に加古川、市川、揖保川、千草川あり。加古川は、上流を佐治川といひ、丹波の西を流れ、久下川を合せて、播磨に入り、高砂に至りて、海に入る。美作の津山川は、備前に入りて、吉井川といひ、一に東大川ともいふ。又美作の高田川は、備前に入りて、旭川といひ、一に西大川ともいひ、岡山を過ぎて、兒島灣に入る。備中の河邊川は、中流を高梁川といひ、下流を大川と稱す。成羽川を合せ、玉島に至りて、海に入る。備後の川は、南北に分流す。三次川、西城川、櫃田川は、安藝の吉田川と會して、北流し、蘆田川は、南流して、福山を過ぎ、海に入る。安藝の太田川は、南流して

海岸

廣島に至り數派に分れて海に入る。周防の錦川は西流して岩國を過ぎ海に入る。此の川に架渡せる錦帶橋は、一に算盤橋ともいひ、奇巧を以て世に著る。此の外、此の國の佐波川、樫野川、長門の厚東川、厚狹川等は、南流して海に入り、阿武川は西流して萩を過ぎ、日本海に入る。

本道には、大なる湖沼なし。温泉も美作、周防等に四五か所あり、れども、著名なるものなし。

海岸。 本道と四國、九州との間なる海は、即瀬戸内の海なり。此の海は、東に明石海峡、鳴門海峡ありて、南に豊後海峡あり。豊後海峡は、高島海峡とも、早吸海峡ともいふ。又西には、赤間が關海峡あり。此の海峡は、一に早柄海峡ともいひ、長門の下の關と、豊前の門司との間、僅に五町餘に過ぎず。こゝに數多の砲臺あり。



島 殿

り。此の海は、此の如く僅に海峡を以て外海に通ずれば、瀬戸内の海とはいふなり。

此の海は、處々に特別の名稱あり。播磨の沖を播磨灘といひ、ここに同國の男鹿島、家島等あり。播磨灘の西に讃岐の小豆島ありて、最も大なり。備前、備中の沖を水島灘といひ、備後と伊豫との間を燧灘といふ。此の海の西に、備後の向島、因島、伊豫の伯方島、大島、大三島、安藝の大崎上島、大崎下島

等あり。安藝の海灣を廣島灣といひ、灣口に同國の倉橋島、能美島、江田島あり。江田島には海軍兵學校あり。灣の西北隅に嚴島あり。此の島に市杵島姫を祀れる嚴島神社あり。此の社は、平相國清盛公の造營にして、岸に傍ひ、海に臨みて、左右に廻廊を繞らし、社前の鳥居は、遙に海中に立つ。其の風景最もよし。之を日本三景の一とす。又此の島は、毛利元就の陶全、姜を誅せし所にして、其の古跡最も多し。周防の大島最も大にして、其の南を硫黃灘といふ。周防の沖は、之を周防灘といひ、赤間が關、海峽の東を壇の浦といふ。有名なる源平の古戰場なり。

抑此の瀬戸内の海は、前に擧げたる諸島の外に、無數の島嶼ありて、處々に散點し、島上多くは、翠松を戴き、風景最も美なり。風風きて、水面鏡を開きたるが如き日、此の諸島の間を航行すれば、

其の愉快いふべからず。

たゞ諸島の風景美なるのみならず、海岸線の屈曲多ければ、沿岸の地も風景に富み、其の間に良港あり。先づ播磨よりいへば、舞子、明石の砂濱は、勝地を以て著れ、飾磨、室津は、良港を以て知らる。備前の兒島半島は、もと島にして、本地との間を藤戸の渡といひ、昔佐々木盛綱が、騎馬にて渡りたる所なるが、今は陸地となりて、僅に一條の細流を遺すのみなり。半島の内を兒島灣といふ。備中の玉島、笠岡、備後の鞆津、尾道、三原は、皆著名の港なり。安藝の吳港は、軍港にして、鎮守府あり。宇品は、近年の築港にして、船舶の良泊地なり。周防の三田尻、長門の赤間が關は、共に著名の港なり。

長門の西と北とは、日本海にして、其の西なる海を響灘といふ。

長門の海岸に引島、六連島、青海島等あり。青海島の北なる孤島を見島といふ。

氣候

氣候。中國山脈に傍へる地方は、氣候稍寒冷なれども、其の他は、一般に溫暖なり。又本道は、周防長門の二國を除き、其の他の諸國は、雨量の最も少き所なり。ろは中國山脈と四國山脈との間に在るを以て、南風も北風も、山脈に遭ひて、其の水分を失ふが爲なり。故に瀬戸内の海は、鹽分多くして、最も製鹽に適す。

産物

産物。本道は、氣候溫暖にして、平野も亦尠からざれば、米、麥、烟草、綿等の農産物豊なり。又美作を除きて、本道の全國と南海道の阿波、讃岐、伊豫との十か國は、有名なる製鹽地方にして、其の産出夥し。中にも播磨の赤穂、周防の三田尻、阿波の齋田等を最も有名なる所とす。銅、鐵等の鑛物は、各地より産す。其の中、備後、

安藝の二國は、鐵の産出最も夥し。

右の外、著名なる産物は、播磨の明石縮、姫路革、龍野醬油、美作津山の雲齋織、備前の伊部燒、備中高梁の擅紙等なり。三備の地は、共に壘表を製す。特に備後は、最も精良なれば、通じて備後表と稱す。又備後鞆津の保命酒、安藝の牡蠣、周防の岩國縮、長門の石炭、石材等は、皆著名の産物なり。

播磨

處誌。播磨の姫路は、市河の西岸に在りて、中國の要衝に當り、本道屈指の都會なり。其の他、明石、高砂、飾磨、室津、龍野、赤穂等を播磨の名邑とす。赤穂は、大石良雄等四十七士の事蹟を以て、名高き所なり。

美作

美作の津山は、國の中央に在りて、美作第一の名邑なり。其の西一里を隔て、院庄あり。兒島高德の櫻樹に、詩句を題したる

備前

地に於て、今其の舊趾に君を祀れる櫻の神社あり。

備前は、美作の南に接して、全國、東大川、西大川の流域に在り。

西大川の西岸なる岡山は、もと池田家の城地にして、今は岡山縣廳所在の地なり。其の人口五萬餘、本道に在りては、廣島に次ぎて、繁華なる都會なり。此の國は、昔有名の賢君池田新太郎少將光政が、熊澤了介といふ學者を用ひて、國政を行はしめたるに、國中よく治まり、水利堤防の事などは、今に至るまで、其の餘慶を蒙ること多しといふ。

備中

備中は、河邊川の流域に在り。大なる都會あらざれども、高梁倉敷、玉島、笠岡等の名邑あり。

備後

備後の福山は、蘆田川に臨める一都會にして、鞆津、尾道、三原は、内海に臨める名邑なり。鞆津は、昔足利尊氏の九州より引返し

安藝

て、京都を犯さんとせし時、此の地より兵を海陸兩道に分ちて進みし所にて、彼の楠正成卿が、湊川にて打死せしは、此の時の事なり。尾道は、近年繁華になりたる地にして、三原は、昔小早川隆景の居城ありし所なり。

安藝は、昔毛利元就、福島正則の交るゝ領せし國にして、近くは、明治の初年まで、淺野家の領地なり。廣島は、即此の三家の居城ありたる地にして、今も本道第一の都會なり。其の人口九萬餘、廣島廳縣、第五師團司令部等ありて、頗る繁華なる地なり。特に明治二十七八年の役起るに及び、大元帥陛下の久しく大本營を置かせられし所なれば、此の地の光榮、大なりといふべし。吳は、もとの村落に過ぎざりしが、近年軍港を設けて、鎮守府を置かれしより、遽に繁華なる地になりたり。吉田は、毛利元就の

廣島に移らざる前、居城を構へたる所なり。此の外、西條、可部等の名邑あり。

周防

周防の山口は、昔は大内家の居城ありたる地なり。降りて文久年間より、明治の初年までは、毛利家の城地となり、現在は、山口縣廳所在の地なり。此の外、周防には、岩國、室津、室積、徳山、三田尻等の名邑あり。是れ等の中、三田尻は、船舶の出入繁く、最も盛なる所なり。

長門

長門は、本道の西端に在り。赤間、關は、一に下の關といひ、又馬關ともいふ。内海の要口に當り、船舶の寄港するもの夥しく、市街は、甚だ繁華にして、人口三萬五千餘あり。萩は、文久年間まで、久しく毛利家の城地にして、昔は盛なる都會なりしが、今は大に衰微せり。

汎論

南海道。

汎論。本州最南の一部分なる紀伊と、淡路島、四國島とを合せて、南海道といふ。四國島は、其の中に、阿波、讃岐、伊豫、土佐の四國あれば、かく名づけたるなり。以上の六國は、現今左の如く七縣にて管轄す。

紀伊の東部二郡。

三重縣。

紀伊の殆ど全部。

和歌山縣。

淡路。

兵庫縣。

阿波。

徳島縣。

讃岐。

香川縣。

伊豫。

愛媛縣。

土佐。

高知縣。

地勢。四國は支那三系の一支なる四國山脈、島の中央に於て東西に連り、全島の分水界となる。されは此の山脈を以て、全島の地勢を兩分し、北側は北に向ひて傾斜し、南側は南に向ひて傾斜し、諸川南北に分流す。但阿波は、四國山脈、本支三條、東走するを以て、諸川其の峽間を流れ、皆東流す。右の如き地勢なれば、島の中央は、山嶽連れども、河岸、及び海邊には、處々に平野あり。紀伊は、紀伊山脈、全國に連り、平野甚だ少し。淡路は、四國山脈の餘派と、中央火山脈との二つありて、全島山嶽多し。

山誌。伊豫、土佐の界なる石鎚山は、其の高さ六千四百尺、四國第一の高山なり。其の東に連れる伊豫の別子山は、有名なる銅山なり。石鎚山に次ぐ高山を阿波の劍山とす。其の外、阿波の祖谷山、燒山寺山、阿波、讚岐の界なる雲邊寺山、讚岐の五劍山、象頭

山、伊豫の瓶森山、鬼城山、土佐の三瀧山、矢筈山等を重なるものとす。紀伊は、北部の高野山、最も名高し。山中の大寺を金剛峯寺といひ、弘法大師の開基なり。南部の那智山も亦有名なり。山中の瀧は、直下八十餘丈、本邦屈指の大瀧なり。それより西北に、大雲取山、大塔峯等の諸山連り、それより東北に八鬼山等連り、深山幽谷、無人の境多し。淡路は、諭鶴羽山、先山等あり。

水誌。紀伊の諸川は、概ね山間の溪流なれば、舟運灌漑の便少し。其中、重なるものを紀の川とす。紀の川は、大和の吉野川の下流にして、和歌山に至り、海に入る。これに次ぐものを有田川、日高川、熊野川等とす。熊野川は、大和の十津川の下流にして、重なる支流を北山川とす。

阿波の吉野川は、四國第一の大河なれば、關東の坂東太郎、九州

の筑紫二郎に對して、四國三郎の稱あり。源を伊豫の瓶森山に發し、東流して阿波に入り、伊豫の銅山川を合せ、尙東流して徳島に至り、數派に分れて海に入る。其の長さ六十一里、下流は、兩岸の地平坦にして、有名なる藍の産地なり。其の外、阿波の那賀川、伊豫の重信川、肱川、土佐の物部川、仁淀川、渡川等を重なるものとす。

温泉

本道にも大なる湖沼なし。著名なる温泉を伊豫の道後とす。此の温泉は、昔景行天皇、仲哀天皇、其他三帝の御幸ありし所なれば、五度御幸の稱ありて、今に至るまで繁華なり。紀伊の湯崎も亦著名の温泉なり。昔は牟婁の温泉といひて、齊明天皇、持統天皇の御幸ありし所なり。

海岸

海岸。紀伊の海岸は、全く太平洋に臨み、其の最南端を潮岬と

いふ。潮流急なるを以て、此の名あり。岬端に燈臺を設く。其の傍の一島を大島といふ。潮岬より伊勢に亘りたる海を熊野灘といひ、鯨の多き所なり。潮岬の西北に、田邊灣あり。和歌山の南に、和歌の浦ありて、有名の勝地なり。

淡路は、東に洲本、由良の二港ありて、西に福良の一港あり。淡路と紀伊との間に、由良海峡あり。之を總稱して、紀淡海峡といふ。此の海峡に、數多の砲臺を設けて、大阪灣の口を扼す。

四國は、北は瀬戸内の海にて、西は豊後灘、南は太平洋にして、東は紀の海なり。淡路と阿波との間は、有名なる鳴門海峡にして、其の間、大約十二町、潮流激して渦を巻き、舟行危険の所なり。鳴門海峡より讃岐の三崎までの間は、海岸線屈曲して、志度、高松、丸

龜多度津等の港あり。高松の東なる半島を屋島といふ。有名なる源平の古戰場なり。讃岐と備前の兒島半島との間は、數多の島嶼散布し、昔は海賊の多き所なりき。三崎と伊豫の大隅、鼻との間は、島嶼少く、港も亦乏し。大隅、鼻と佐田岬との間なる一港を三津濱といひ、其の前面なる興居島は、其の形、富士山に似たるを以て、伊豫の小富士といふ。佐田岬と土佐の蹠蹠崎との間に、八幡濱、宇和島等の港あり。土佐は、東と西とに岬角斗出し、東は室戸崎にして、西は即蹠蹠崎なり。此の兩岬の間を土佐灣といふ。古史に「天武天皇十三年、大地震の時、土佐の國の田苑五十餘萬頃、没して海となる」とあれば、ある人は「此の兩岬の間、全く陥没したるならん」といへるが、又ある人は「沿岸數里の地、陥没したるに過ぎざるべし」といふ。孰れが是なるか、詳ならざれども、後

説或は眞に近からん。此の沿岸に須崎、浦戸、高知、安藝等の諸港あり。土佐の海は、鯨の多き所に於て、又珊瑚のある所なり。室戸崎と阿波の蒲生田岬との間に、日和佐港あり、蒲生田岬と鳴門海峡との間に、小松島、徳島、撫養の諸港あり。

氣候

氣候。四國は、中央に連亘する四國山脈を界として、南北の氣候自ら異なり。南は、黒潮の影響を蒙り、甚だ温暖なれども、北は、其の影響を蒙ることなければ、南よりも温度稍低し。雨量は、南北によりて、大差あり。南は、多く、北は、少し。ろは前節にいへるが如く、中央の山脈によりて起る結果なり。紀伊、淡路も、南北によりて、温度雨量の差あること、畧四國に同じ。

産物

産物。全道海國なるを以て、水産物甚だ多し。其の中、重要なものは、阿波、讃岐、伊豫の鹽、紀伊、土佐の鯨、土佐の鱧節等なり。

又陸産にては、四國の砂糖最も重要なり。今は砂糖の産地なる臺灣島、我が版圖に入りたるを以て、四國は、我が國第二の製糖地方となりたれども、元は第一位を占めき。四か國の中、最も多く産する國は、讃岐なり。

右の外、紀伊の木材、蜜柑、和歌山の綿、フナキル、淡路の三原燒、阿波の藍玉、阿波縮、讃岐の保田織、伊豫の銅、松山縞、土佐の半紙、樟腦、珊瑚等も亦有名の産物なり。特に半紙は、其の産額、極めて多く、吾人の日常用ふる半紙は、概ね土佐の産なり。

●處誌。紀伊は、全國山多く、たゞ紀の川の下流に僅の平野ありて、こゝに和歌山の一市あり。此の地は、徳川三家の一なる紀州家の舊城地なり。人口五萬五千餘、本道一二の大都會にして、和歌山縣廳、こゝに在り。商業盛に行はれ、主として大阪と取引す。

紀伊

湯淺、田邊、新宮を名邑とす。新宮及び本宮、那智の三處に、熊野三社を奉祀す。

淡路

淡路は、内海の一孤島なれども、田畝開け、漁業盛にして、人口多き國なり。洲本、由良、福良の三地を名邑とす。

阿波

阿波は、四國山脈國の中央を東西に走りて、地勢を兩分す。山脈の北は、吉野川の流域にして、之を北方と稱し、山脈の南は、那賀川の流域にして、之を南方と稱す。徳島は、吉野川の下流なる三稜洲に在り。市街繁盛にして、人口六萬餘、近傍諸國の船舶、河口に輻湊して、物貨の聚散活潑なり。此の地は、もと蜂須賀家の城地にして、今は、徳島縣廳所在の地なり。撫養、小松島、日和佐は、共に舟泊地にして、此の國の名邑なり。

讃岐

讃岐は、北の海岸に、源平の古戰場多し。即高松、屋島、檀の浦、牟

禮志度等の地、皆當時の史上に見ゆ。高松は、人口三萬四千餘、香川縣廳所在の地にして、繁華なる一都會なり。高松の西海岸なる白峯は、崇徳上皇の陵地にして、其の宮趾を鼓岡といふ。丸龜は、高松に次ぐ一都會にして、多度津、坂出は、船舶の寄港するもの多く、觀音寺も亦一の名邑なり。象頭山は、丸龜の南に在りて、こゝに琴平神社あり。四國第一の社にして、諸國より參詣する者多し。



琴平神社

伊豫

伊豫は、北と西との二面海に臨みて、魚鹽の利多く、田畝も開けて、鑛山にも富む。松山は、國中第一の都會にして、人口三萬四千餘、愛媛縣廳、こゝに在り。宇和島、今治は、松山に次ぐ都會にして、八幡濱、三津濱、西條、川之江も亦著名の地なり。

土佐

土佐は、山嶽多くして、平野少けれども、全山樹木にて蔽はれ、良材に富む。特に海岸地方は、樟樹繁茂して、盛に樟腦を製出す。高知は、此の國第一の都會にして、人口三萬七千餘、市街繁盛なり。此の地、もとは、山内家の城地にして、今は高知縣廳の所在地なり。高知の南なる浦戸は、人口二千に足らぬ村落なるが、昔は長曾我部元親、こゝに居城を構へて、四國全島を征服し、武威を輝したる所なり。其の他、中村、須崎、高岡、安藝等の名邑あり。

汎論

西海道。

汎論。西海道は九州の一大島と壹岐、對馬、琉球の三島とより成る。九州島は古五か國に分れて、筑紫の國、火の國、豊の國、日向の國、熊襲の國といひ、總稱して筑紫島といひしが、其の後、筑紫は、筑前、筑後、肥前、火の國は、肥後、豊の國は、豊前、豊後となり、日向の國は、元のまゝにて、讀方のみ變り、熊襲の國は、大隅、薩摩の二國となりたり。抑我が國にては、夙に朝鮮との關係ありて、屢軍を出すことありけるが、本道は、其の要衝に當るを以て、守備を嚴にし、今の筑前の國に、太宰府を置きて、全道の政治を掌らしめき。其の後、太宰府を廢して、鎮西府を置きしかは、昔は鎮西とも稱せり。本道の十二か國は、現今左の如く八縣にて管轄す。

筑前、筑後、及び豊前の西部六郡。

福岡縣。

豊前の東部二郡及び豊後

大分縣

肥前の東部一市十郡

佐賀縣

肥前の西部一市六郡及び壹岐對馬

長崎縣

肥後

熊本縣

日向の殆ど全部

宮崎縣

日向の南部一郡及び大隅薩摩

鹿兒島縣

琉球

沖繩縣

(琉球は本道に屬すれども便宜の爲處誌の條に於て地勢氣候等を一括して説明す故に是れより處誌に至るまでの諸項は琉球を合著せざるものと知るべし)

地勢

地勢。九州島には支那山系に屬する二條の山脈ありて、各西南より東北に向ひて走り、其の北なるを筑紫山脈といひ、南なるを日向山脈といふ。筑紫山脈は、一は肥前の南部より筑後、肥後

山誌

の界を東走し、折れて北に向ひ、筑前、豊前の界を走り、一は肥前、筑前の國中を東北に向ひて走り、共に一旦赤間關海峽にて陥落し、更に中國山脈となる。日向山脈は、肥後の南部より肥後、日向の界を北走し、折れて東に向ひ、豊後、日向の界を走り、一旦豊後灘にて陥落し、更に四國山脈となる。此の二山脈の間は、瀬戸内の海より連る中央火山脈なり。又日向山脈の南なる霧島山より西南に向ひて連る火山脈は、霧島火山脈なり。

九州島は、右の如く數多の山脈ありて、此の山脈は、全島の分水界となり、諸川は、東西南北に分流す。其の河邊及び海岸には、往々平野ありて、中にも大なるものを肥前の佐賀近傍、肥後の西北部等とす。是れ等の平原は、有名なる米の産地なり。

山誌。筑紫山脈中の重なる山嶽は、肥前の京岳、筑後の熊渡山

筑前の背振山、天拜山、寶滿山等なり。日向山脈中の重なる山嶽は、肥後の白髮岳、市房山、日向の行勝山等なり。中央火山脈中の重なるものは、肥後の阿蘇山なり。此の山は、有名の活火山にして、常に硫烟を噴出し、又屢振動することあり。其の東に連る豊後の由布嶽、鶴見嶽、其の西に連る肥前の温泉岳、其の北に連る豊前の彦山は、皆中央火山脈に屬し、鶴見岳、温泉岳は、活火山にして、由布岳、彦山は、燭火山なり。霧島火山脈の主嶽なる霧島山も亦著名の活火山にして、東西二峯に分れ、東を矛峯といひ、山上に天の逆矛といふものあり。西を韓國岳といひ、東に比ふれば、稍高くして、六千八百餘尺あり。此の霧島山は、即古の謂ゆる高千穂峯にして、神武天皇の宮居ましませし所なりといふ。此の火山脈は、延きて薩摩の櫻島岳、開聞岳となり、海に入りて、寶七島の各

川

火山となり、遠く琉球の鳥島に及ぶ。
 ●水誌。九州の川は、大概二三十里の長さにして、其の中、最も長きは、四十餘里に至るものあれども、短きは、十餘里に過ぎず。筑前には、遠賀川あり。其の上流を嘉麻川といひ、豊後より來る赤池川を合せ、北流して、蘆屋浦に至り、響灘に入る。筑後には、筑後川、矢部川あり。筑後川は、源を肥後、豊後の界なる獵師岳に發し、肥後より豊後に入りて、日田川となり、豊後の諸水を合せて、筑後に入り、久留米を過ぎ、若津港に至りて、海に入る。此の川は、九州著名の川にして、一に千年川といひ、又筑紫次郎といふ。其の長さ三十五里、灌漑運漕の便あり。河中に太刀洗石の名所あり。昔南朝の忠臣菊池武光が、少貳、大友の兵と戦ひ、敵の大軍を打破り、血に染まりたる太刀を洗ひたる所なりといふ。豊前に

湖 海岸

は山國川驛館川あり。山國川の上流は有名なる耶馬溪にして、奇石怪巖簇り立ち奇勝を以て世に顯る。豊後には大分川大野川あり肥前には嘉瀬川松浦川あり。肥後は菊池川白川緑川球摩川あり。球摩川は日本三急流の一にして其の上流に有名なる五箇の莊あり。平家の落人こゝに住ひ一郷皆其の子孫にて、他と婚嫁を通ぜず自ら別天地を爲すといふ。日向には五箇瀬川美々津川一の瀬川大淀川等あり。大隅には著き川なく薩摩に川内川あり。其の長さ四十六里本道第一の長流なり。本道には湖沼少し。著名なるものは薩摩の開聞岳の麓なる池田湖にして周回四里餘の火口湖なり。温泉は中央火山脈に當る諸國即豊後肥後肥前の三國最も多し。

海岸。九州島の東海岸は屈曲稍少く且島嶼も多からざれど

も其の他の海岸は屈曲甚だ多く大小の島嶼海岸に散在すれば、其の間に岬角海灣出入して良港に乏しからず。

筑前の海岸は鐘岬を界として東は響灘西は玄界灘なり。玄界灘は風濤荒き所なり。其の海岸に博多灣あり。灣の前面には一條の砂洲西に向ひて斗出し之を志賀島といふ。青松白砂相映じて風景最もよろし。肥前の北には唐津名古屋の諸港あり。其の西に伊万里灣ありて灣内に鷹島福島等あり。筑前肥前の海岸は昔元の兵の來襲せし所にして此の鷹島の近海は敵艦の覆没せし所なり。

壹岐は玄界灘の西に在りて周回三十五里對馬は壹岐と朝鮮との間に在りて上島下島の二大島あり。上島は周回五十里下島は周回百三十六里兩島の間は一灣ありて之を淺茅浦といふ。

壹岐と對馬との間は、即對馬海峽にして、對馬と朝鮮との間は、即朝鮮海峽なり。

肥前の西海岸には、彼杵半島、長く突出して、其の内に一灣あり。之を鯛浦といひ、又大村灣といふ。灣口に、佐世保軍港ありて、彼杵半島の南に、五港の一なる長崎港あり。長崎港は、數島港口を圍みて、四方の風を遮り、碇泊に便なり。其の西南に斗出するを野母崎といふ。野母崎の北なる高島は、有名なる石炭の産地なり。野母崎の東に島原半島ありて、其の南端に口津の港あり。野母崎と島原半島との間は、千々石灘にして、天草下島の西の海は、頼山陽の詩を以て名高き天草灘なり。島原半島の東に灣入したる海を有明灘、又は筑紫瀉といふ。肥前の屬島なる平戸、五島等の諸島は、孰れも大なり。是れ等の沿海は、鯨の多き所なり。

肥後の海岸は、宇土半島突出して、其の西端に三角港あり。半島の北は、即有明灘にして、南は、八代灣なり。此の灣内には、秋夜火光を放つことあり。之を不知火といふ。火の國の名、これによりて起れり。灣の外には、肥後の天草上島、天草下島、薩摩の長島等羅列す。長島の西南なる甑島も亦薩摩に屬す。天草下島は、最も大にして、周回七十里、北岸に富岡港あり。薩摩、大隅は、共に半島を爲し、其の内に、鹿兒島灣あり。灣内の一島を櫻島といひ、其の櫻島岳は、山上常に硫烟を吐く。大隅の南端を佐多岬といひ、燈臺の設あり。其の南海に散在する種が島、夜久島、口の永良部島、及び大島、喜界が島、徳の島、沖の永良部島、與論島等は、皆大隅に屬す。又其の西に列る口の島より、寶島に至る七島は、之を寶七島といひ、黒島、硫黃島、竹島と共に薩摩に屬

して共に霧島火山脈に接し、各島概ね活火山あり。其の脈、延きて琉球の鳥島にまで及ぶ。

日向の海岸は、殆ど一直線にして、たゞ南に有明浦、東に細島港あるのみなり。其の沖を日向灘といふ。豊後の海岸は、屈曲多く、佐賀、關、臼杵、佐伯の諸港あり。地藏崎と伊豫の佐田岬との間は、即早吸海峡にして、其の間三里に過ぎず。豊前は、海岸線の屈曲少けれども、尙長洲、中津門司、小倉等の諸港あり。

氣候

氣候。九州の氣候は、殆ど一樣なれども、南と北とは、多少の違あり。筑前、肥前の北部は、日本海に臨みて、西北の寒風を受くるを以て、冬時寒氣稍強し。それより南するに従ひ、次第に暖氣を増し、薩隅日の三國に至りては、降雪甚だ少くして、雨量は、最も多し。又夏秋の際は、屢猛烈なる西南風に襲はるゝことあり。

産物

産物。本道は、氣候溫暖にして、地味も亦肥沃なれば、農産物饒なり。農産物は、種々あれども、其中、重要なるものは、肥前、肥後の米、大隅、薩摩の甘藷、筑前、筑後の生蠟等なり。肥後は、米の外、各種の農産物に富むこと、九州の第一に位す。本道は、種々の礦物にも富めども、其中、最も多く産する重要な品は、石炭なり。筑前、筑後、肥前、肥後、豊前等の諸國、皆産せざるはなく、著名なる地を筑後の三池、肥前の唐津、高島とす。

右の外、九州著名の産物は、筑前の博多織、筑後の久留米、綿、豊前の小倉織、豊後の疊表、肥前の伊万里焼、唐津焼、長崎煙草、五島近海の鯨、肥後の煙草、日向の半切、椎茸、大隅の國府煙草、大島の黒砂糖、薩摩の薩摩焼、竹器、疊表、鯉節等なり。

筑前

處誌。筑前は、昔全道の政務を司る太宰府のありし國にして、

其の舊趾は博多の東南五里に在り。今は其の地を總稱して、太宰府町といふ。此の地は菅原道真公の薨せし地にして、公を祀れる天満天神の社あり。博多は古來有名の港にして、其の市街は福岡に接し、今之を福岡市と稱す。福岡市は人口五萬八千餘熊本に次ぎて、本道第二の大都會なり。福岡はもと黒田家の城地にして、現今福岡縣廳ここに在り。昔仲哀天皇の熊襲を御親征ありし時、博多の近傍なる香椎の行宮にて、崩御あらせられしかば、皇后其の兵を轉じ、三韓を征服して凱旋し給ひ、香椎の近傍なる箱崎の地に於て、應神天皇を分婣し給ひき。香椎神宮、箱崎八幡宮は、即兩帝を奉祀せる所なり。

筑後

筑後は九州の中にて、最も小なる國なり。重なる都會を久留米、柳川とす。又若津港は、繁盛なる舟泊地なり。三池は、有名な

豊前

る石炭の産地なり。

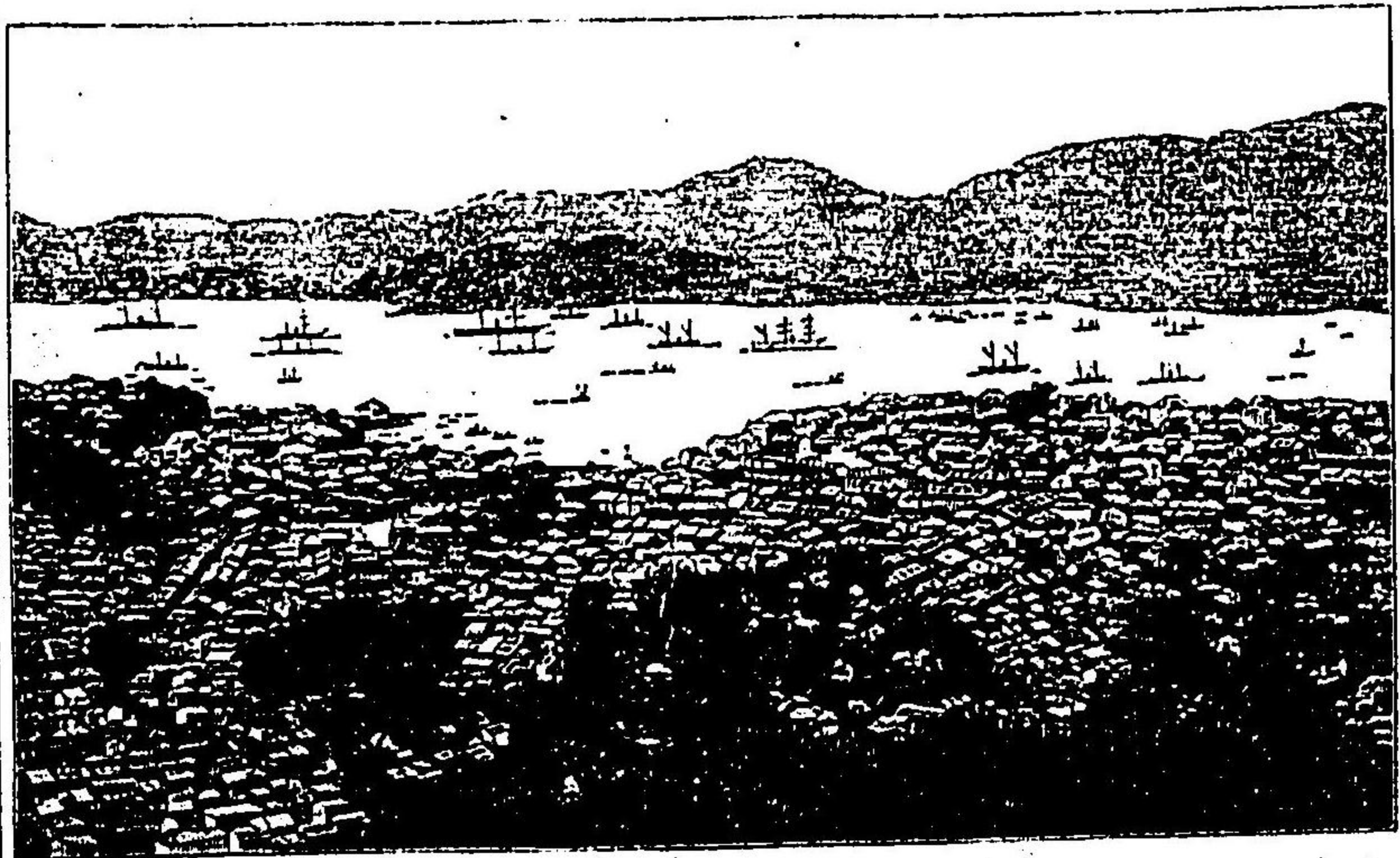
豊前は、海岸に臨みて、小倉、門司、中津、長洲等の名邑あり。門司は、海峽を隔て、長門の赤間關と相對し、九州鐵道の起點に當れば、近來遽に繁華の地となれり。國の東隅なる宇佐に、八幡宮あり。和氣、清麿卿の事跡を以て、最も名高し。

豊後

豊後も海岸に臨みて、杵築、大分、臼杵、佐伯、佐賀、關等の名邑あり。内地に竹田の名邑あり。大分は、大分川の下流に在りて、大分縣廳所在の地なり。

肥前

肥前は、海岸線の屈曲多く、其の間に數多の良港あり。長崎は、五港の一にして、内外の船舶出入し、貿易盛に行はる。重なる輸出品は、石炭、米、鰯等にして、重なる輸入品は、砂糖、生牛皮、練綿等なり。抑此の港は、寛永年中、支那、和蘭の兩國に限り、通商を許した



る所に於て、昔我が國にて、外國と貿易せしは、たゞ此の一港のみならずしが、其の後、他の四港を開きて、諸外國と貿易することよばなりたるなり。現今の人口六萬七千餘、長崎縣廳こゝに在り。佐世保は、近年開設の軍港なれども、鎮守府所在の地なれば、人口年々増して、繁華なる地となりたり。此の外、大村、諫早、島原、口の津等は、皆長崎縣の名邑なり。島原の南に、原城の舊址あり。此の地は、天草一

揆の時、賊の立籠りたる所なり。佐賀は、もと島鍋家の城地にして、現今の人口殆ど三萬、佐賀縣廳の所在地なり。此の外、蓮池、有田、伊萬里、唐津、名古屋等は、皆佐賀縣の名邑なり。名古屋は、昔太閤秀吉公の朝鮮征伐せし時、本營を置きし所なり。

肥後

肥後は、昔加藤主計、頭清正、此の國を領せし時、大に水利を開きて、灌漑の便を計りしかば、今に至るまで、其の餘澤を蒙ること夥し。其の熊本城は、君が築きたる有名の堅城にして、西南の役の時、賊軍之を圍むこと數月なりしが、遂に陥ること能はざりき。熊本は、加藤家滅亡の後、細川家の居城となり、今は熊本縣廳所在の地に於て、第六師團司令部、高等學校等ありて、人口七萬餘、九州第一の大都會なり。熊本の外、山鹿、川尻、宇土、三角、八代、佐敷、人吉等の名邑あり。三角は、近年の築港なれども、頗る繁盛なり。

日向

日向は、大なる都會なし。宮崎は、宮崎縣廳所在の地なれども、人口一萬に満たず。延岡、細島、美々津、高鍋、佐土原、佷肥、都城を名邑とす。

大隅

大隅も亦大なる都會なし。たゞ鹿兒島灣に臨みたる國府、加治木等を名邑とす。

薩摩

薩摩の鹿兒島は、もと島津家の城地にして、今は鹿兒島縣廳所在の地なり。此の地は、文久年間、英人と戦ひ、其の後、明治十年にも戰場となりたるが爲、市街概ね兵燹に罹りけるが、今は漸く舊に復し、人口五萬五千餘ありて、九州南部の一大都會なり。此の外、谷山、揖宿、山川、津出水、阿久根、加世田、坊津等を薩摩の名邑とす。壹岐は、肥前の北七里に在る孤島にして、島中の名邑を勝本といふ。

壹岐

對馬

對馬は、もと宗家の領地にして、其の居城は、下島嚴原なりき。故に今も尙對馬第一の名邑なり。抑此の國は、昔より朝鮮の往來に當る要津なれば、國名を津島といひ、後今の字に改めたるなり。

琉球

琉球は、大隅の輿論島の西南海中に在りて、大小五十餘の島嶼あり。此の島嶼は、自ら二つの群島を爲し、東北の一群を沖繩群島といひ、西南の一群を先島群島といふ。

沖繩群島は、沖繩島最も大にして、周回百十里、之を三部に分ち、北部を國頭といひ、中部を中頭といひ、南部を島尻といふ。中頭の西南隅なる那覇は、琉球第一の都會にして、人口三萬餘、沖繩縣廳、學校等あり。首里は、那覇の東一里許に在り。此の地は、もと、琉球王の都にして、今も人口二萬五千餘、那覇に次ぐ都會なり。

國頭の運天港も亦有名の所なり。沖繩島の外、重なる島を慶良間諸島、久米島等とす。

先島群島は、宮古、石垣、入表の三島を大なりとす。其の外に、波照間、與那國等の島あり。此の先島群島中、石垣島以西の島々を總稱して八重山島といふ。

凡て琉球の諸島は、南方に位して、且黒潮の流域に在れば、氣候温暖にして、霜雪を見ること稀れなり。氣候は、かく温暖なれども、地味悪しきが爲、穀物の如きは甚だ少く、土人は、十中の八九、甘藷を常食とし、甘藷熟せざる時は、蘇鐵を食す。重なる産物は、甘藷、砂糖、泡盛、琉球紬、薩摩絣等なり。

北海道。

汎論

汎論。北海道は、我が國の最北部に位し、蝦夷島及び千島列島より成る。其の面積廣大なれども、人口は、最も少し。全道の人口僅に三十四萬餘にして、一方里につき、平均五十六人に當る。之を人口の最も稠密なる畿内の一方里に比ぶれば、實に百分の一に過ぎず。

抑蝦夷人即あいぬ人は、古は本州の地に跋扈したる野民なりしが、屢征伐せられて、遂に本道に退き、本道は、多年の間、彼れ等の巢窟となり居たるが、明治二年、北海道とし、渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島の十一國に分てり。此の時、千島は、國後、擇捉の二島のみにして、樺太は、我が國と露西亞との兩屬なりしが、同八年、露西亞と相議して、樺太を全く彼れに譲り、得撫

より占守までの群島を我れに收めて、之を千島に屬し、是に於て全道の經界定まれり。

本道は、明治二年、北海道となしたる時、開拓使を置き、開拓に従事せしめ、其の後、札幌、函館、根室の三縣としたるが、久しからずして、之を廢し、北海道廳を置き、全道を管轄せしめて、今に至る。

地勢。蝦夷島は、樺太山系に屬する蝦夷山脈、南北に連りて、中央火山脈、東西に連り、殆ど十字形を



蝦夷人

山誌

爲す。故に中央の地高くして、それより四面の海岸に向ひ、次第に傾斜し、數多の河水、此の斜面を流下す。河水の流域は、概ね平坦にして、石狩の平野、十勝の平野、釧路の平野等最も大なり。然れども、石狩の平野の南部の外は、未だ茫漠たる荒野たるを免れず。他日、是れ等の地、變じて田圃となりたらんには、其の収益測るべからず。

山誌。蝦夷山脈中、重なる山嶽は、石狩、天鹽、北見の界に天鹽岳あり、石狩、北見、十勝の界に、石狩岳あり、石狩、十勝の界に十勝岳あり、日高、十勝の界に芽室岳あり。又中央火山脈中、重なる山嶽は、釧路に硫黃山、雄阿寒岳、雌阿寒岳あり、石狩に夕張岳あり、膽振に樽前山、有珠岳、後方羊蹄山あり、渡島に恵山あり。是れ等の山嶽中、最も名高きは、後方羊蹄山にして、八千尺あり。其の他は、二三

川

千尺より六七千尺の間に出入す。

水誌。本道の川は、屈曲多くして、他道の川とは、其の趣を異にす。こは河邊の枯木、自ら倒れて、河水を堰き留め、河道を變ずるに因る。うれが爲、他道の川に比ぶれば、割合に長し。諸川の中、最も大なるは、石狩川にて、其の長さ百六十七里、實に本邦第一の長流なり。源を石狩岳に發し、西流して、二千尺餘の大瀧となり、山間を流下して、上川の原野に出づ。此の地は、蝦夷島の殆ど中央にして、他日離宮を設けさせらるべき地なり。川は此の平野を西流して、雨龍川、空知川を合せ、石狩の平野を南流して、江川を合せ、西流して、石狩港に至り、日本海に入る。此の川は、鮭の繁殖すること極めて夥し。故に世間にては、鯉の瀧上りといふことをいへども、此の川にては、鮭の瀧上りといふ奇觀あり。石狩川

湖沼

海岸

に次ぐものを天鹽川、十勝川、釧路川、後志川、北見の常呂川等とす。湖沼は、北見の猿間湖、最も大にして、周回十八里、根室の楓蓮沼、北見の網走湖、これに次ぐ。是れ等は謂ゆる海岸湖なり。又膽振の洞爺湖、支笏湖、釧路の阿寒湖、釧路湖等は、孰れも火口湖なり。海岸。蝦夷島の海岸線は、大概平直なれども、たゞ其の西部には、大なる屈曲あり。其の津輕海峽に臨む所は、白神、矢越、鹽首、恵山の四岬突出す。矢越、鹽首、兩岬の間は、一大灣を爲して、灣頭更に函館灣を爲す。灣中の函館港は、港内廣くして、大艦巨船數十艘を容るゝに足り、日本全國中、無類の良港なり。恵山岬の西北なる火山灣は、一に内浦ともいひ、灣口の繪鞆崎に擁せらるゝ港は、軍港に撰定せられたる室蘭なり。繪鞆崎より襟裳崎までの間は、海岸線平直にして、良港なし。襟裳崎より納沙布崎までの

間には、厚岸灣、花咲港等あり。納沙布崎と知床崎との間に、根室灣あり。灣内の根室港は、水浅くして、大船を容るゝこと能はず。れども、東北の海岸中、先づ碇泊に適するものは、此の一港のみなり。知床崎より宗谷岬までは、良港なし。且冬時は、沿岸に氷塊堆積して、船を寄すること能はず。宗谷岬の西に宗谷港あり。野斜布崎より積丹崎までの間には、二三の港あり。其の中、小樽は、高島崎出て、港外を擁すれば、東風の外は、皆遮ることを得、西海岸中、安全の良港なり。積丹崎の西なる神威崎より白神崎までの間には、岩内、壽都、江刺、福山等の諸港あり。

千島は、國後、擇捉、得撫、新知、捨子、古丹、溫禰、古丹、波羅、茂知、占守、阿頼度等、凡て三十二島あり。諸島皆火山質にして、數多の活火山あり。又此の沿海は、最も霧の深き所なれば、航海の危険なる所あり。

なり。千島の外、大なる島は、渡島の奥尻島、天鹽の利尻島、禮文島、根室の色丹島なり。

氣候

●氣候。本道の氣候は、處により一様ならず。東海岸は、親潮の寒流に洗はれ、西海岸は、對馬海流の暖流に洗はる。故に同緯度の地にては、前者は、後者よりも寒し。是れ等の影響を蒙らざる地、即中央の上川地方に至りては、寒氣甚し。又阿哥都科海に瀕する地は、親潮に洗はるゝが上に、北風を真正面に受くるを以て寒氣甚し。然れども、本道は、世人が想像するが如く、凜冽なる寒地にはあらず。たゞ冬期長くして、夏期短きのみなり。雪も北陸道のある地方の如くには深からず。蓋雨量は、最も少き所なり。

産物

●産物。本道は、水陸とも、天然の産物に富み、我が國の寶庫とも

の左岸に位し、人口二萬八千餘、市街を札幌區とす。北海道廳、農學校、師範學校、病院、其の他、各種の製造所會社等あり。小樽、空知、太幌、内室蘭へ鐵道通じ、交通便利にして、百貨輻湊し、繁盛なる一都會なり。

函館は、函館灣に臨み、人口六萬六千餘ありて、本道第一の都會なり。市街を函館區とし、豪商軒を連ねて、諸會社、學校等あり。此の地は、五港の一にして、外國貿易盛に行はる。重なる輸出品は、昆布、硫黃の二つにして、重なる輸入品は、石油なり。

右の外、人口一萬以上の地は、渡島の福山、江刺、後志の小樽、根室の根室にして、其の他は、海岸の小村落のみなり。福山は、もと松前家の城地にして、本道に在りては、最も古き名邑なり。江刺は、福山を距ること遠からずして、西海岸の一名邑なり。小樽は、札

幌との間、鐵道の便あれば、日本海を渡りて、札幌に至らんとする者、必此の地に上陸す。故に船舶輻湊して、繁華なる地なり。根室は、東隅の一名邑にして、近傍の海産物、こゝに輻湊す。

汎論

臺灣島。

汎論。臺灣島は、琉球の與那國島の西に在りて、北緯二十一度五十三分より、二十五度十六分に至り、東經百二十度十五分より、百二十二度四分に至る。故に南部は、熱帯に屬して、中央部以北は、北温帯に屬す。其の形、南北に長くして、東西に短く、恰も木葉に似たり。此の島は、元支那の屬島なりしが、日清戦争の後、明治二十八年四月二十日、御批准になりたる馬關條約に據り、同年六月三日に支那より請取りたる我が新領地なり。

右の如く本島は、新に我が領地となりたるものにて、政治區劃の如きは、未だ制定せられざるなり。因て姑く支那にて定めたる最近の政治區劃をいへば、支那にては、此の全島及び附近の島嶼を合せて、臺灣省と稱し、更に之を臺北府、臺灣府、臺南府、臺東州

の四大部に分ち、又之を數多の縣と廳とに分てり。其の區劃左の如し。

臺北府。

基隆廳。

宜蘭縣。

淡水縣。

新竹縣。

苗栗縣。

臺灣縣。

彰化縣。

雲林縣。

埔裏廳。

臺灣府。

臺南府。

嘉義縣。

安平縣。

鳳山縣。

恆春縣。

澎湖廳。

臺東州。

府の下に屬する廳といふは、之を散廳といひて、其の實、縣と同じものなり。又臺東州の州といふは、之を直隸州といひて、其の實、府に同じものなり。但此の臺東州は、本島の東部全体の區劃にして、其の地は、蕃族の巢窟なれば、たゞ名義のみ臺東州といへるものにて、其の實は、全く未開の地方なり。故に其の下には、縣も廳もあることなし。

地勢

地勢。島の形に従ひて、中央より稍東に偏し、北より南に連る一條の大山脈あり。此の大山脈以東は、其の支脈旁出して、東海岸に至るまで、大山高嶽打重り、森林鬱鬱たり。此の地方は、即蕃族の棲息する所にして、未だ全く暗黒世界なり。大山脈以西は、次第に傾斜し、海岸地方に至りては、一面の平野にして、田圃相望み、嘗て支那人の住居せし所なり。

山誌

山誌。前にいひたるが如く山嶽は、東部に多けれども、未だ開けざる地なれば、其の状態を知るに由なし。たゞ現今最も著名なるは、シルヴヤ山とモリソン山との二つなり。前者は、北部に在りて、其の高さ一萬一千三百尺、後者は、中央に在りて、一萬二千八百五十尺ありといふ。果して然らば、後者の如きは、富士山よりも高きこと四百八十尺、實に本邦第一の高山といふべし。又

水誌

北部の山脈は、概ね火山質なれば、隨ひて地震の多きこと内地に異ならずといふ。

水誌。本島は、地幅狭ければ、大河あらざれども、其中、重なるものを淡水河とす。此の河は、上流を大姑陷河といひ、臺北府の西なる猛艸に至りて、シンシヤム河を合せ、臺北府の北なる大稻埕に至りて、基隆河を合せ、西北流して、淡水港を過ぎ、海に入る。此の河、河口より猛艸に至るまでは、小汽船通ず。又上流は、兩岸峻崖にして、崖邊古梅多く、風光甚だ美なりといふ。此の外、島の西部に、大甲溪、大肚溪、虎尾溪、八掌溪、二層行溪、淡水溪等ありて、平野の間を環流し、皆臺灣海峽に注ぐ。

海岸

海岸。本島は、北は東海に臨みて、西は臺灣海峽に臨み、南は支那海に臨みて、東は太平洋に臨む。かく四面海に臨めども、海岸

線の屈曲少く、且東岸は、一体に峻崖にして、西岸は、諸川より吐出す泥砂堆積して、海底遠淺なり。故に東西の海岸には、港灣少し。たゞ東岸の蘇澳、西岸の安平、打狗タコをは著名なりとす。蘇澳港は、水深くして、船舶の碇泊に便なれども、安平は、海底砂洲多きを以て、船舶は、海岸を距ること一里の外に碇泊し、僅に端舟を用ひて、貨物を運搬す。打狗タコも吃水淺き船にあらざれば、港内に入ること能はず。西海岸には、此の二港の外、鹿港、笨港、布袋嘴等あれども、皆良港とはいひがたし。

東西の海岸は、右の如き有様なれども、北海岸には、基隆、淡水の二港ありて、稍良港なりとす。基隆は、港内廣くして、大船巨舶の碇泊に適し、海水も亦清くして、風景頗る佳なり。然れども、東北風を遮るべきものなきと、潮流の急なるとは、此の港の缺點なり。

島嶼

淡水は、淡水河を溯ること十八町餘に在り。港内砂洲あるを以て、船舶の碇泊に便ならざれども、よく之を浚はゞ良港となるべしといふ。

本島の南端を南岬といひ、其の西を南西岬といふ。兩岬の間は、一灣を爲して、之を南灣といふ。此の灣は、東北の定期風吹く時は、碇泊に適すれども、西南の定期風吹始まりては、甚だ危険にして碇泊すること能はず。

島嶼。澎湖列島は、澎湖島、白砂島、漁翁島の三大島及び八罩島、倉島、戎克島等、大小五十五島あり。八罩島、倉島及び附近の小嶼を合せて、ロウアイ群島といふ。澎湖、白砂、漁翁の三大島は、相抱きて、其の内に大灣を爲し、三十餘艘の艦船を容るゝも尙餘りある良灣なり。全島の人口大約八萬、概ね支那の厦門地方より移住

せる者にして、漁業を専らとす。全島樹木なく、居民は、米穀を臺灣島に仰ぐ。媽宮は、嘗て澎湖廳のありたる所にて、戸數七八百澎湖列島中、第一の名邑なり。

紅頭嶼は、臺灣の東南に在り。此の島には、蕃族住居し、専ら漁業に従事す。其の人口大約一千人に過ぎざるべしといふ。火燒嶼は、紅頭嶼の北方に在りて、人口大約五百あり。此の人民は、琉球より移住したる漁民なりともいひ、支那人なりともいふ。此の外、臺灣の沿海に、龜山、小琉球の二島あり。

氣候

氣候。本島の南部は、熱帯に屬すれば、氣候の炎熱なるは、素よりにて、夏期は、華氏の寒暖計九十餘度に達す。然れども山嶺より吹き下す涼風、炎熱を掃へば、健康を害するに至らず、夜間の如きは、特に爽快を感ずといふ。又冬期は、溫暖にして、綿衣を重ね

産物

るに及ばず。雨量は、一体に多く、特に北部を多しとす。又風向は、夏季は西南風にして、冬季は東北風なり。此の定期風は、最も猛烈にして、東北風の時は、塵埃空に舞ひて、咫尺を辨ぜざることあり。又西南風の時は、波浪西岸を打ちて、全く船舶の往來を絶つ。

●●産物。本島の重要なる産物は、茶、砂糖、樟腦、石炭の四種なり。

茶は、本島第一の産物にして、専ら北部にて製し、其の産額頗る大なり。砂糖は、南部にて製し、其の産額夥し。然れども、製法未だ精しからず。樟腦は、中央部の山中にて製し、其の産額大なれども、是れ亦製法宜しからず。石炭は、鑛脈富みて、全島到る處採掘し得れども、現今重なる地は、基隆の附近なり。此の四種は、本島の四大産物と稱すべきものなり。

右の外、農産物は、米と甘藷とを重なるものとし、其の他、藍、烟草、落花生、胡麻、生姜、胡瓜、鳳梨、檸檬等、多く産出す。又樹木は、樟樹の外、松、杉、及び熱帯植物多し。動物も種々ありて、最も多きは、鹿と豚との二つなり。魚類は、基隆、淡水の近海、最も多しといふ。又鑛物は、石炭の外、砂金、石油等あり。砂金は、基隆河の邊にて採集し、石油は、中央の地に多く涌出す。之を要するに、本島は、各種の事業、未だ幼稚なるが爲、天然の富を空しく抛擲し置く有様なれば、これが改良進歩を計らば、非常の富源となるべし。

人民

●人民。本島の人民の中、臺北、臺灣、臺南、三府の中に住する者は、嘗て支那より移住せし者なり。此の人民は、風俗習慣、全く支那人と異なることなく、農業又は商業等に従事す。臺東州に住する人民は、皆蕃族にして、之をハイワン人種、チーワン人種、アミヤ

人種、ペゴワン人種の四種に大別す。此の四種の中、前の三人種は、凡て生蕃と稱し、兇暴なる野民にして、専ら獸獵を事とす。或は農業、漁業を爲す者もあり。後の一人種は、之を熟蕃と稱し、溫和なる野民にして、農業を營む者多し。是れ等は、何れより移住せしか、詳ならざれども、支那人の移住せし前、夙に此の地方に住居せる人民なるべし。右の支那人と蕃族との外に、客家と稱する一種族あり。此の種族も支那より移住せる者なるが、支那の移住民とは相和せずして、争鬭絶ゆることなし。住所は、中央の山中にて、専ら農業を事とす。

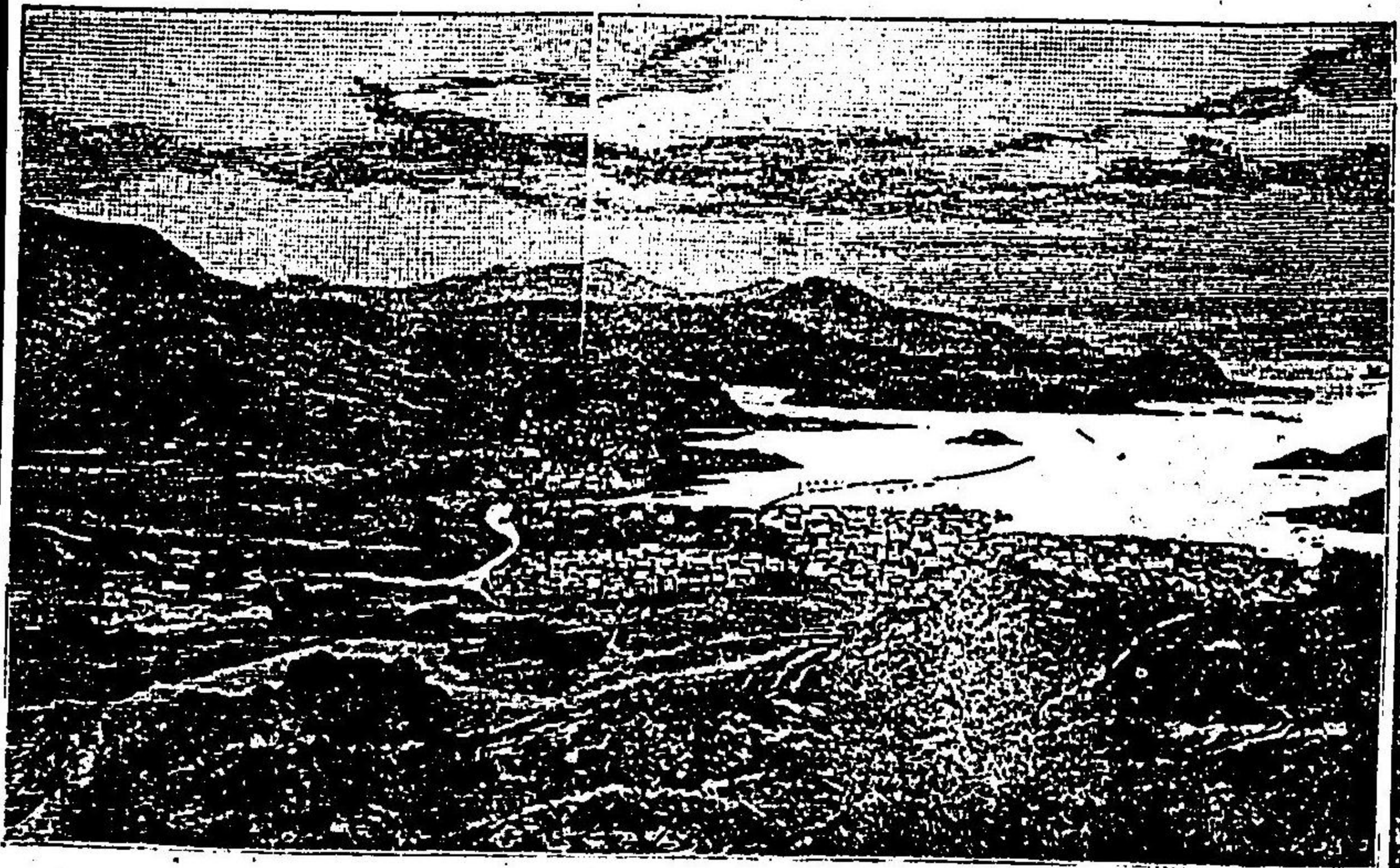
●處誌。三府、一州の區劃に従ひ、各地の都會名邑につき、其の概況を述べれば、左の如し。

臺北府

●臺北府。臺北府は、臺灣島北部の一區劃にして、三府の中、其の

境域は最も小なり。府城は、元臺灣省の首府にして、現今臺灣總督府の所在地なり。此の府城は、近年築きしものにて、周圍に城壁を繞らし、市街は廣く且清潔にて、家屋は概ね二階造なり。市中に電氣燈あり、乗合馬車あり、人力車ありて、甚だ繁盛なり。此の府城より、東は基隆に至り、西は新竹に至る鐵道あれば、交通便利なり。府城の西なる一大市街は、即艋舺にして、商店多し。又府城の北なる一大市街は、即大稻埕なり。大稻埕の地は、臺灣隨一の茶の市街にして、諸方より製茶をこゝに輸送し、こゝにて再製したる後、淡水港を経て、支那の厦門に輸出す。此の大稻埕と艋舺とは、臺灣の中にて、最も商業の盛なる所なり。此の兩地と府城内とを合せて、戸數大約四千許あり。

基隆は、一に鷄籠とも書す。府城を距ること九里許、人口大約



七萬あり。此の地は、開港場にして、重なる輸出品を石炭とす。然れども、其の貿易甚だ盛ならず。此の地は、清國の佛國と戦端を開きたる時、一時佛軍に占領せられたる所なり。

淡水港は、淡水河口を溯ること十八町餘の右岸に在りて、人口大約十萬、有名なる開港場にして、重なる輸出品を茶及び樟腦とす。茶は甚だ盛なれども、樟腦の輸出は、日々に衰ふる有様なり。淡水

港の東に接する地を扈尾といひ、亦有名の所なり。右の外、臺北府内の重なる所は、東に宜蘭蘇澳港ありて、西に新竹あり。宜蘭縣の管内は、熟蕃の多く住へる所なり。

臺灣府

臺灣府は、臺灣島西部の中央なる一區劃にして、其の境城甚だ廣し。府城は、一の城郭を爲せども、住民の數未だ多からず。此の地は、もと清國政府にて、一旦臺灣省の首府と爲しけるが、地理の不便なるが爲、明治二十七年に、改めて臺北府を首府と定めたり。

彰化は、大肚溪の南に在りて、人口大約二萬、臺灣府内第一の都會なり。大肚溪の河口なる鹿港は、商賈輻湊して、繁華なる港なり。前年佛軍に北部の諸港を封鎖せられたる時、島内の清人は、此の港より支那本土へ往復したりとぞ。此の外、苗栗、埔裏、雲林

臺南府

の各地は、元皆一縣一廳の治所と定めたる地なれども、未だ盛ならず。

臺南府。臺南府は、臺灣島西部の南部なる一區劃にして、其の境域、臺灣府に亞ぐ。府城は、周圍に城壁を繞らし、市街は、狹隘にして、不潔なり。之を臺北府城の規模整然として、且清潔なるに比ぶれば、大に遜色あり。然れども、人口大約十五萬ありて、頗る繁華なり。元來征臺の役には、いづれの都會城地も多少兵燹に罹らざる所なけれども、此の地のみは、平穩なりしかば、全く舊觀を存す。

安平港は、臺南府の西一里許に在る開港場なり。此の地は、支那の宋の代以前より、夙に外國と貿易を開きたる所なるが、船舶の碇泊不便なると風浪甚しきとを以て、永く衰へ居たるが、近年

に至り、稍盛になりたりといふ。重なる輸出品は、米、砂糖、樟腦等なり。打狗タカは、安平港の南十餘里に在る開港場にして、重なる輸出品を砂糖とす。此の地は、近年安平の稍盛なるが爲、大に衰微せりといふ。此の外、臺南府内には、嘉義、鳳山、恒春、及び布袋、嘴港、笨港等あり。

臺東州

臺東州。臺東州は、前にもいへる如く蕃族の巢窟にして、未だよく探検したる者もあらず。故に全く暗黒世界にして、其の状況、詳ならざれども、蕃族の村落を何社と稱し、其の數、概ね百餘ありといふ。

汎論。

氣候

氣候。一國の氣候は、緯度の高低、風向、潮流等に関係するものなれば、是れ等の有様を知らざれば、其の國の氣候を知ること能はず。さて我が國につきて、是れ等の有様を示せば、概畧左の如し。

緯度の高低

我が國は、北緯二十一度五十三分(臺南端)より起りて、五十度五十六分(千島の國阿端)に終る。故に極南の臺灣島は、其の南部、熱帯に屬し、それより以北は、總て北温帯に屬すれども、極北の地は、殆ど六十度に達す。されば、處によりて、大に寒暖の差あり。今其の一例を擧ぐれば、臺灣島にありては、酷暑の時、華氏の寒暖計九十六七度に昇り、酷寒の時も四十五度より降らず。然るに蝦夷島の宗谷ソウヤにては、酷暑の時、八十二三度に昇れども、酷寒の時、零

度に降る。されは熱さに於ては僅に十三四度の差なれども、寒さに於ては、四十五度の差あり。

風向

我が國の風向は、一年の中、大約二様あり。夏季は、東南風にして、冬季は、西北風なり。此の西北風は、亞細亞大陸の寒地を吹渡りて、來るものなれば、其の寒氣特に甚し。又夏秋の交には、屢暴風起りて、それが爲に大害を蒙ることあり。此の暴風は、毎年支那海に起りて、それより我が國に襲ひ來るものにて、二百十日の厄日とて、農家の最も苦慮するは、即此の暴風なり。

潮流

黒潮、親潮の二流が、我が全國の沿海を環流するは、序説に於て説きたるが如し。黒潮は、暖流なれば、溫暖を空氣に傳へ、親潮は、寒流なれば、寒冷を空氣に傳ふ。されは、黒潮の上より吹來る風は、溫暖にして、親潮の上より吹來る風は、寒冷なり。此の二流が、

雨量

我が國の氣候に影響を及ぼすこと甚だ大なり。

右の諸項を約言すれば、我が國は、緯度の高低により、處によりて、寒暖の差あるは素よりなれども、其の外に、國の位置、亞細亞大陸に接近するを以て、大陸より吹來る寒風の餘響を受け、緯度の割合には、稍寒し。然れども、幸に黒潮の暖流あるが爲に、大に寒氣を和け、溫暖の氣候を有することを得るなり。

又我が國は、溫暖諸國の中にては、雨量多き國なり。然れども、全國各地の雨量は、素より差等ありて、一樣ならず。最も多き地方は、紀伊、土佐、日向、大隅の南部、加賀、能登、越中なり。最も寡き地方は、瀬戸内の海、本州の中央部、蝦夷島なり。我が國の雨量は、甚だしく一時に偏することなく、大概一年中、程よく降れども、其中、稍偏するは、夏季にして、六月中旬より、七月中旬に至る梅雨の

時なり。此の時は各地とも降雨多く、我が國の濕潤季なり。又冬季は、太平洋に面する方は、乾燥季にして、降雨少けれども、日本海に面する方は、濕潤季にして、雨雪多し。

生業及
び産物

生業及び産物。我が國の氣候は、温暖にして、地味も亦肥沃なれば、天産物饒にして、人民の生業は、農業、工業、林業、牧畜、漁業、鑛業、商業等なり。今是れ等の概況を示せば、左の如し。

農業

農業。我が國の古名を瑞穂ミズホの國といふ。うは穀物よく登りて、稻の穂のみづくしきが爲なり。かやうに土地柄の稻に適へるが上に、列聖、農事に御心を注がせ給ひ、田野を闢き、農桑を勸課し、池塘を作り、溝渠を通じて、只管人民の衣食を豊ならしめんとせさせ給ひしより、農業は、我が國を立つる基本とはなりたり。さればにや、平野は勿論、山間海隅に至るまで、よく開けて、田圃を

工業

見ざる地なく、農夫の數は、實に全國人口の三分の一を占む。其の重なる産物は、第一は米にして、麥これに次ぎ、その他、大豆、小豆、粟、稗、黍、蜀黍、蕎麥、實綿、甘藷、馬鈴薯、大麻、藍葉等、枚舉に遑あらず。又農業の一派なる養蠶、製絲の業は、近年日増に盛大に赴き、其の産額夥しく、是れに次ぎて盛なるものは、製茶なり。此の生絲と茶とは、外國貿易上、第一の輸出品なり。

工業。我々日本人が、指頭の器用なると、高妙なる意匠に富むるとは、外國人の遠く及ばざる所なり。されば、此の指頭を動かし、此の意匠を用ひて、造り出す器物は、一種特絶の風致あり。又近年西洋の器械を用ひて、新に起したる工業も尠からず。今我が國固有の重なる製造品を擧ぐれば、諸織物、諸彫刻物、陶器、磁器、漆器等にして、又新工業の重なる製造品を擧ぐれば、綿絲、印刷紙、

林業

摺附木等なり。

林業。我が國は、地味肥えて、草木よく生育するを以て、國內何れの處にも森林を見ざるはなく、松、杉、檜、櫟、栗、樅、檜、榎等、繁茂す。是れ等の樹木は、伐りて材木と爲し、吾人の需用に供ふるもの甚だ多し。又森林の繁茂するとせざるとは、氣候の調和、水源の養ひ等に關係あれば、政府にては、林區を設け、林務官を置き、山林の保存培養を怠らず。

牧畜

牧畜。畜産の重なるものは、牛、馬なり。是れ等は、近年外國の良種を輸入して、頻に改良を計る。牛の産地は、九州及び中國を以て第一とし、馬は、九州及び、奥羽を第一とす。豚の飼養盛なるは、東京、千葉、長崎、鹿兒島、沖繩等の諸府、縣及び臺灣なり。牧羊は、千葉縣及び北海道等に行はる。之を要するに牧畜は、他の民業

漁業

に此ふれば、未だ盛なりとはいふべからず。

漁業。我が國は、四面海を環らして、其の魚族に富むこと極めて盛なり。特に北海道の沿海は、各道誌の條にもいへるが如く、世界の三大漁場と稱して、魚族の豊富なること、實に無盡藏といふべし。全國沿海の魚類、枚舉に違あらざれども、其中、價額の第一を占むるものは、北海道の鯡なり。又鱈、鮭、鯛の類は、孰れも價額大なり。是れ等の外、北海道の臘虎、臘肭臍及び沿海の處々に出没する鯨等を重なるものとす。

我が國は、此の如く水産に富めるを以て、其の漁獵法宜しきを得は、陸産にも劣らざる富源なり。然るに漁具の不完全、資本の不足等の爲に、規模狭小にして、充分其の富を収むること能はず。彼の臘虎、臘肭臍の如きは、見すく外國の密獵者に捕獲せらる。

豈遺憾ならずや。

鑛業

鑛業。我が國の鑛業は、近年に至り、頗る發達し、孰れの鑛山も西洋の新器械を用ひて、採掘せざるはなく、其の最も著名なる鑛山は、佐渡、生野、阿仁、尾去、足尾、三池、高島、幌内等なり。是れ等の諸鑛山にて採掘する鑛物の中、我が國にて最も多量に産出するは、銅と石炭との二つなり。其の他、金、銀、鐵、鉛、安質、母尾等處々より産出す。又大理石、御影石、石磐石等の石材、水晶、瑪瑙等の寶石、石油、陶土等の産あり。

商業

商業。我が國の商業は、昔と今とを比ぶれば、全く其の状態を異にして、今日は、日々隆盛に赴く景況なり。蓋昔は、全國封建の有様にて、箇々別々に一地方を劃して、有無相通せず、交通も亦不便なりしが上に、農は民の本業として尊みしも、商は民の末業

交通

として卑める風なりしかは、微々として振はざりき。然るに今は全國一政府の下に在りて、且交通の便大に開け、世人も商業の大切なることを覺り、銳意これが進歩發達を謀れば、其の隆盛に赴くも亦宜なり。今内國商業の地にして、最も繁華なる所を舉ぐれば、東京、大阪、名古屋、仙臺、廣島、熊本の六市とす。東京は、全國商品の聚散地にして、大阪は、關西の商品輻湊する所、之を我が國の二大商業地となす。是れ等の諸市の外、横濱、神戸等五港の地も商業盛に行はるれども、こは全く外國貿易に關す。

交通。交通の便不便は、國の進歩に影響を及ぼすこと甚だ大なり。されば、各國共にこゝに注意せざるはなし。我が國にて、も王政維新後、大にこれが改良進歩を計り、今にては、道路、鐵道、郵便、電信、電話、海運等の交通大に開けて、之を昔日の不便に比ぶれ